

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その1）

——動詞と形容詞“清楚”の結びつきを通して——

大 滝 幸 子

- 1 はじめに
- 2 “清楚”の意義素記述
 - 2.1 辞書の語義解釈に基づく“清楚”の語義記述、および類義語の選択
 - 2.2 主述統合型を通しての意義素分析
 - 2.3 連体修飾統合型と述語賓語統合型を通しての意義素分析
 - 2.3.1 “清楚”語義Ⅰの分析
 - 2.3.2 “清楚”語義Ⅱの分析—形容詞・特徴と動詞・特徴
 - 2.3.3 “明白”“明確”と“清楚”の意義素記述
 - 2.3.4 上記意義素の“清楚”語義Ⅲ言語資料に対する説明能力
- 3 形容詞“清楚”と動詞を組み合わせる統合意義特徴
 - 3.1 VA型・V得A型・A地V型の統合意義特徴検討の手順
 - 3.2 調査資料の作成方法
 - 3.3 思考行為動詞と“清楚”の統合
 - 3.3.1 “了解”との統合
 - 3.3.2 “認識”との統合
- 4 おわりに

1 はじめに

筆者はこれまで、中国語の動詞（Vと略す）と形容詞（Aと略す）とが構成する次の三種類の統合型の統合型そのものの文法的意義特徴（以下、統合意義特徴と呼ぶ）を考察する方法を模索してきた⁽¹⁾。

I, 述語結果補語統合型（以下、VA型と略す）

II, 述語様態補語統合型（以下、V得A型と略す）

III, 状語中心語統合型（以下、A地V型と略す）

考察の対象とした用例は、公刊物とインフォーマント調査資料とから選び出した。まず、VA型について『漢語動詞—結果補語搭配詞典』北京語言学院出版社1987の項目の中から形容詞を補語に用いた統合（日常生活で使用可能な単語の組み合わせ）を取り上げ、『實用漢語形容詞詞典』中国標準出版社1989の用例の中から異なる動詞とのVA型の統合例を補充した。そして更に、VA型としては成立しないがV得A型としては統合できる動詞と形容詞の組み合わせを取りだした。最後にこれら公刊物に掲載された用例に対し、北京、上海、沈陽、四川省の出身者から「VA型、V得A型、A地V型の統合型の中で自分が使うか使わないか」について内省報告を集めた。その内省報告には当然のことながら異同があるが、異なった報告の出た組み合わせのみを再調査の対象とし、全員に文脈を添えた用例として配布し、再度「聞いて理解できるかできないか、自分も使うか使わないか」について確認をとった。その結果、内省報告の揺れや個人差をできる限り捨象したデータとして共通回答と分裂回答の区別が明確になり、共通の語感と個人別の語感を分けることが可能になった。内省報告の調査結果は、統合意義（統合された各単語の意義素、及び前後の文脈から補充された統合の背景となる意義〈文脈意義〉）が統合意義特徴によって一つの単位にまとめられた、統合型がその文中で表示する意義）を検討する

基本的資料⁽²⁾として用いることができると考えられる。

研究をすすめる最初の段階では、資料作成にあたって動詞と形容詞とをいずれも固定せずに、しかも文学作品の中での用例収集よりも辞書の著述の中からの用例を幅広く拾い挙げた。考察の対象をまず辞書に採録されるような典型的統合に絞り、かつそれらの統合がどのような語感を伴っているかを調べる事に拠って統合型そのものの「典型的統合意義特徴」の輪郭を捉えようとしたのである。したがって、この段階で記述してきた統合意義特徴は、あたかも常識的な知識を研究上必要な意味論的術語で書き換えたにすぎないかの如き印象を読者に与えるかもしれない。しかし、以下の3点で従来深く検討されてこなかった文的事実とそれに対する解釈を提出するべく努めてきた。

- (1) VA型について、連体統合型内と主述統合型内での使われ方の違い、つまり陳述（話し手がコミュニケーションの現場で、発話を言い切るために必要な文法的意義特徴⁽³⁾）が充たされない場合と、充たされる場合とでは、動詞と形容詞の組み合わせがどのように異なっているか。
- (2) V得A型について、程度副詞“很”を加えた判断形容詞⁽⁴⁾と重疊形としての描写形容詞の文法的語義的意義特徴にどのような違いがあるか。
- (3) A地V型について、統合を成立させるため動詞にどのような付加成分を加える必要があるか。

次に動詞の求める格（意義素を構成する意味的事項のうち、他の言語形式によって表示されるもの）を考察対象に含めた、NVA型、NV得A型、NA地V型へとインフォーマント調査の資料構成を拡大した。VA型については、形容詞の種類を固定し、動詞の文法的意義特徴、特に格の違いが、(N)VAN型の統合成立に与える共起制限を調査した。固定する形容詞としては、単音節の判断形容詞の中から、計量形容詞、形状形容詞という語義的グループ（具体的には“長短、粗細、厚薄、大小、高低矮、深淺”）をとりあげた。

また、他の形容詞と異なり、NA得V型という統合をつくれる感情・感覚形容詞についても、語義的グループを設定して動詞との共起制限を考察した。

筆者はこれらの知見を得るにあたり、そのつど、これまで自らが扱ってきたところの文法論および意義素分析方法では十分な解釈をなし得ないと考えられる用例を見いだしては、新たな角度からの意味記述の方法論を模索してきた。しかし、未だより一般的な文法的説明をなし得る分析結果と解釈を提出するにはいたらなかったように思う。

本稿では上記の研究の道程のうえにたって、判断形容詞（判断スケール⁽⁵⁾を用いる）“清楚”と、その評価形容詞形“很清楚”（副詞“很”は、判断形容詞“清楚”の意義素内の帰属度スケールを、比較基準になる程度を分割点としてみためて、どちらかの側に固定する機能を果たす。ベクトル的な量の測定値を固定していること、スケールに分割点が生じている点で、評価スケール⁽⁵⁾を用いる評価形容詞に近い）と、描写形容詞形“清清楚楚”（程度判断そのものと否定判断を放棄し、かつ比較の対象がない点で、描写形容詞に近い。また、事点⁽⁶⁾に関わるという点では動詞に近い）を区別する。そして、判断形容詞をA、評価形容詞形をA'、描写形容詞形をA''として3種類に分けたうえで、VA型、V得A型・V得A'型・V得A''型、A地V型・A'地V型・A''地V型の統合意義特徴を分析することにする。

さらにまた、動詞V項に異なる動詞の類を挿入し、その統合型全体が表す意味（以下、統合意義と呼ぶ）を検討して、統合型に独自の統合意義特徴を抽出するために、以下の意味論的前提を用いることにする。

(1) 文単位の統合意義（以下、叙述内容⁽⁷⁾と呼ぶ。文は「最大統合型」から成る言語形式とみなせる）は次の4つの要素からなる。

- ① 統合型（品詞レベルでの配列順序）が表示する統合意義特徴
- ② 統合している単語が表示する2つの意義素の総和
- ③ 前後の文脈から、その統合に補充された文脈意義

④文の叙述内容を話し手が情報としていかに捉えているか？ いかに伝達するか、という陳述意味（従来の陳述論における術語を用いて、以下、述定特徴と伝達特徴と呼ぶ）からの意味的フィードバック

(2) この統合意義を構成する4種類の要素のあいだには、統合の成立不成立を支配する優先順位が、①→②→③→④の順序で存在している。

(3) 統合意義特徴は、まず、次の文法的機能を果たすものとして考察されるべきものとする。

統合意義特徴は、その統合型を構成する二つの項（文法成分を表示する文法的位置）を補填する二つの単語が、語義的呼応関係を結ぶにあたり、その呼応関係の成否に対して影響を与える。

(4) 文は発話行為で伝達を行う際の最小単位であり、意義的にも「一つの全体（「ゲシュタルト」と呼ぶ）」である。文は、それが言語形式のまとまりとして成立した時点で、「叙述時点と叙述地点とが定まった状況」を背景または地として有している。この状況は、言語形式によって表現されない場合でも、常に、文の意義の中に背景部分として含まれている。そして統合意義もまた叙述を営む際の一つの単位であり、ゲシュタルトと見なすべきである。

したがって、統合意義特徴は、統合型内の単語の語義的呼応関係を決定するとともに、それを文脈意義や陳述意味を情報的背景または地としたうえで前景または図となるゲシュタルトとしてまとめ⁽⁸⁾、取り出すための認知方法⁽⁹⁾を規定するものと捉えることができる。

2 “清楚”の意義素記述

2.1 辞書の語義解釈に基づく“清楚”の語義記述、および類義語の選択

各単語に独自の意味を「意義素（または意味素）」と呼ぶ学統を「意義素論」

として概観するならばその当初の定義では、意義素の内部構造は①語義的意義特徴②文法的意義特徴、さらに③文体的意義特徴という3種類の「意義特徴の束」の集まりとして規定されていた。そして、言語の意味にも音声と同じく各言語ごとに体系が存在するとする構造主義的観点から、意義特徴の捉え方に2つの角度が用いられた。一つは、各意義素をその単語だけが表示する唯一固有の意義素として成立させるために必要な意義特徴を「弁別的特徴」として区別する記述方法であり、もう一つは類義語関係にある単語の意義素を相互に区別する決め手となる意義特徴を「示差的特徴」として記述する方法であった⁽¹⁰⁾。

本稿ではまず、この当初の意義素論の分析方法とその考え方に基づいて、“清楚”と類義語関係にある単語との意義素体系を検討し、その意義素の語義的意義特徴と文法的意義特徴を捉えることにする。

類義語を選び出す手順および結果は次のとおりである。

大滝1999(注5参照)では、中国において定評のある中中辞典3種⁽¹¹⁾を用いて、それらの“清楚”に対する語義解釈をたどった。各国で評価の定まった辞典は、その言語体系で最も常用され、かつ典型的用法とみなされる用例を扱うことにより、意味分析において一度は考慮すべき語彙項目と語義解釈を示しているものと考えられるからである。その結果、以下の3種類の語義の区別すなわち弁別的特徴を見いだした。本稿ではその結論に少しく補足を加え(補足箇所は波線アンダーラインで示す)、語義記述を以下のように定める。

【“清楚”の語義的意義特徴の概略】

〈語義I〉 認識主体に潜在的な能力がある(明らかにプラス評価が加わる)
人間が理解能力という点で優れているという〈属性〉
(属性=永続的に備わっている超時的状態。以下同じ)

EX. 頭脳/神志清楚。

〈語義II〉 認識主体が能力を発揮し、その成果をあげる

人間が事柄を正確に理解しているという〈精神過程〉
(過程＝出来事と状態の間にある叙述類型)
(→変化の対極にある状態は“鬻塗”)

EX. 這件事的經過他很清楚。

EX. 這個問題你清楚不清楚？

EX. 我還不清楚這回事兒。

〈語義III〉 認識の対象となる事物が備える性質が捉えられている

人間によって明確に識別され理解されうる〈性質〉を有する
(性質＝状況によって変化しうる可変的状态。以下同じ)
(→変化の対極にある状態は“模糊”)

EX. 字跡清楚。 話說得清楚。 把工作交代清楚。

以上、3種類の語義〈語義I〉〈語義II〉〈語義III〉を中中辞典の語義記述から見出すにあたっては、“清楚”の語義解釈に他の形容詞による置き換えを用いずに、“了解”が使用されている(對事物了解很透徹：思惟正常，能正確地了解事物：了解：事物容易讓人了解，辨認)ことが、注目される。このことは“清楚”が中国語形容詞の中で基本的な形容詞とみなされていること、また“了解”という人間の認知活動のありかたを形容詞の角度すなわち能力や性質としても捉えていることを示している。したがって、本稿では“了解”も“清楚”の類義語として考察対象に加えることにする。(3.3項)

次に、“清楚”については形容詞による置き換え記述がおこなわれていないことから、大滝1994では、4種類の同義語・近似語辞典⁽¹²⁾を用いて、中国語として日常的に“清楚”と置き換え可能な類義語グループとして、“清楚”“明白”“明確”“分明”“清晰”があることを確認した。本稿では、相互の示差的特徴を検討し、個々の意義素を体系的な位置づけを与えることにより、統合意義特徴を分析するときの基本的情報の一つとして使用する。

言語資料の検討方法としては、語義的意義特徴の分析に統合型の差異が影響を与えないように、統合型ごとに類義語の用法を比較検討する。そののち、単語ごとの文法的意義特徴および統合型の統合意義特徴の分析にとりかかることにする。

2.2 主述統合型を通しての意義素分析

そこで、服部 1968 b における意味分析のための基本的な二つの作業原則に基づき、まず主述統合型（以下、「SP 型」と略称する）を用いて“清楚”の類義語の語義的意義特徴を記述することにする。二つの作業原則とは下記のものである。

- (1) 同位置の作業原則＝同じ自立語と同じ統合型・文型によって統合される自立語は同じ語義的意義特徴を共有する
- (2) 相互呼応の作業原則＝互いに統合され得る自立語は、互いに呼応する語義的意義特徴を有する。

この方法で形容詞の意義素を検討する場合、SP 型を用いれば最も初歩的な成果をあげやすいと予想される。

なぜならば、形容詞や動詞という述語になれる用言は、その意義素の中に、他の言語形式によって補填されねばならない意味的なブランクすなわち「格」を含み、それらの「格を充たす」ために選定される「体言的概念を表す言語形式」に対して、ある語義的意義特徴を要求している。動詞の場合は、主語の位置と賓語の位置とに格を充たす言語形式（以下、「格補填語」と呼ぶ）を要求するが、形容詞の場合は主語の位置にのみ格補填語を求めるからである。

以下、大滝 1999 における分析結果を簡略に引用し、用例を補足しながら、“清楚”とその類義語の意義素について考察を加える。

【“清楚”と“清晰”との違い】

口語と書面語という文体上の違いがもたらすさまざまな文法機能の違いとなって現れる。“清晰”は重疊形をつくらず、VA型で結果補語にならず、判断形容詞としての基本的な文法機能のいくつかをもっていない。そこで本稿では“清楚”の類義語としては扱わないことにする。

【“清楚”と“分明”の違い】

主語として“黒白”“公私”のように二項対立の表現がとれるかとれないかに示差的特徴が端的に現れる。“清楚”はとれないが、“分明”はとれる。それは“分明”の意義素の内部に「他のものと分けて、或いは内部構成を分けてはつきり認識する」という「分ける認識過程」が示差的特徴として含まれるためと考えてよいであろう。この“分”という判断活動の結果“明”という状態が生じるという語義的な内部構造をもつ“分明”は、重疊形をつくらず、VA型で結果補語にもならない。V得A型で結びつく動詞も“看”“聽”など判断を行うための知覚的行為を表示する動詞や、“寫”“講”などの判断活動を客観的に表現するような生産的活動に限られる。

【“清楚”と“明確”の違い】

“明確”の判断対象は「その事柄に関わる人間が、自らその事柄の不鮮明または不安定な状態を一定の状態に確定できるもの」に限られる。すなわち、人間の意志によって鮮明度や安定度の変化をつけられないものや事柄は、“明確”の判断対象にはなりにくいいため、格補填語が“态度”“目的”“方向”“意思”など精神行為が生み出す抽象的存在（以下、「精神生産物」と呼ぶ）に限られる。

例えば、“這張設計圖很○○”の空位置に“清楚”を入れると、印刷が鮮明であることから理解し易いことまでを指示できる。それに対し“明確”を入れるためには、“設計”“構思”など作成に関わる意図を“設計圖”のあとへ挿入して主述述語文へ変化させるか、“制作得”など生産的行為のありかたを挿入

してV得A型へ変化させねばならない。少なくとも、それらの挿入成分は「文脈や発話場面の状況において、話し手と聞き手の間で旧知の共通情報（「旧情報」）」であり、かつ主語として選ばれた語彙と「習慣的な連想によって選ばれる頻度の高い、近接関係にある語彙（以下「連想語彙」と呼ぶ）」を選ぶ必要がある。

【“清楚”と“明白”の違い】

“字跡”を主語にとれるかとれないかが両者の間の示差的意味特徴を端的に示している。“清楚”は知覚による区別がつきさえすれば、その物（または事柄）を判断対象としてとりあげられるが、“明白”は「判断者が頭を働かせて考えてみないと、その内容が理解できない事柄」でなければ判断対象にはとりあげられない。したがって、“字跡很清楚”とは言えるが“字跡很明白”とは言えない。

上記の示差的意味特徴の記述が的確なものであるならば、意義素論の立場から自然言語の類義語グループ（以下、「シソーラス」と略称する）に関して、比較的普遍的なものと思われる2つの言語事実が指摘できよう。

- (1) 基礎的語彙を中心とするシソーラスにおいて、示差的意味特徴は周辺語彙の意義素に含まれる。すなわち、基礎的語彙であればあるほど、意義特徴の規定は少ない。
- (2) 基礎的語彙は、その意義素が格を担う語彙に要求する弁別の特徴を、状況に拠る文脈意義（または場面意義）から補充できる可能性が高い。すなわち、その具体的文中における用法に典型的用法から周辺の用法へのバリエーションが多く存在する。

2.3 連体修飾統合型と述語賓語統合型を通しての意義素分析

次に連体修飾統合型（以下、「AN型」と略称する）を用いて意義素記述を

すすめる。形容詞と名詞との組み合わせのなかには、AN型内で使えるのにSP型内では使えない組み合わせ（「AN優先タイプ」と呼ぶ）と、SP型内で使えるのにAN型内では使えない組み合わせ（「SP優先タイプ」と呼ぶ）がある。筆者はかつて、日本語表現との対照を通してこの2タイプを探し、SP型とAN型の統合意義特徴を記述しようと試みた⁽¹³⁾。本項ではその考察を踏まえたうえで、“清楚”シソーラス（“清楚”“分明”“明白”“明確”）の単語がどの名詞とAN型内で組み合わせるかをSP型内での組み合わせとも比較しつつ考察し、おのおのの語義的意義特徴と文法的意義特徴を分析する。なお、統合意義特徴が複雑にならないように、形容詞は単独で用いる。すなわち程度副詞のついた評価形容詞形や、重畳形へ変形した描写形容詞形ではなく、判断形容詞の原形のまま用いた。考察対象とする名詞は、“清楚”の語義I II IIIを考慮して次の27個を選んだ。

【“清楚”語義I】（7個）人間が理解能力に優れているという〈属性〉

頭脳, 脳子, 脳袋, 神志
記憶力, 脳筋, 思路

【“清楚”語義II】（12個）人間が事柄を正確に理解しているという
〈精神過程〉（＝知覚思考動詞とのユレあり）

問題, 意思, 目的, 動機
想法, 看法, 態度,
情況, 事情, 内容,
認識, (對~的) 了解 ……… “了解”の動詞用法とも対比する

【“清楚”語義III】（8個）事物が人間によって明確に識別され理解されると
いう〈性質〉

倒影, 聲音, 字跡,
帳目, 設計圖,
原因, 印象, 内容, 故事

インフォーマントは北京出身者3名、ハルピン出身者1名、四川省出身者1名に依頼し、適宜北京出身の20歳代の学生に意見を求めた。このようにして収集した内省報告、すなわち、シソーラス単語・4×名詞・27個×インフォーマント・5名=540項の調査結果を一覧表に整理しなおして掲載する。

【“清楚”シソーラス調査表：AN型とSP型での用法】

(1) インフォーマント氏名および表中の【符号】

北京出身者：【Y】楊光（男）1968年生

【C】蔡曉軍（女）1956年生

【エ】閻紅生（女）1949年生

ハルピン出身者：【チ】張榮（女）1949年生

四川省出身者：【W】王岳川（男）1956年生

(2) インフォーマントへの指示一覧

形容詞+構造助詞“的”+名詞=連体修飾統合型（AN型）と名詞+形容詞=主述統合型（SP型）の2種類の組み合わせ方法で、使えるか使えないかを、答えて下さい。

次のマークを用いて、記入欄の：の左側にAN型の用法を、右側にSP型の用法を記入してください。

◎（聞いただけですぐ理解できる。自分もよく使う）

△（ある話しの流れがある場合に使える。）

×（文法的におかしい。方言色が強くて、自分は使わない）

(3) 本稿に掲載する調査表の記入方法

各インフォーマントが◎マークをつけた箇所を、インフォーマント名の符号で記入する。

5人中2人しか◎マークをつけなかった統合型では、その少数派意見の持ち主であるインフォーマントから具体的な用例を集めた。表中に例文番号を示し、また多数派の意見も注記した。

2.3.1 “清楚” 語義 I の分析

(1) SP 型と AN 型の統合意義特徴の再確認

【表 I】では、類義語“頭腦”“腦子”について、ともに SP 型で“清楚”と組合わさるのに対し、AN 型では前者が“清楚”と組み合わさるのに対し、後者は組み合わされないという区別がみられる。この区別は AN 型と SP 型の統合意義特徴の区別によって生じたものと考えられる。

そこで、大滝 1995 : pp 196-197 で指摘されている、AN 型と SP 型の統合意義特徴にみられる示差的特徴の一つを再確認しておく。この示差的特徴は必ずしもそれぞれの弁別の特徴として挙げられるべきものではないが、名詞と形容詞との組み合わせを考察する場合には、共起制限の要件として無視できないと考えられる。

大滝 1995 では、「SP 型“小刀鋒利”の名詞“小刀”と形容詞“鋒利”の組みあわせが、AN 型では“鋒利的刀尖”を用いることはできても※“鋒利的小刀”としては使わないこと」、「SP 型“手法漂亮”が AN 型でほぼ同一の意味領域を表すためには、“漂亮的手藝”（※“漂亮的手法”）となり、名詞の選択を変更すること」などの例を挙げ、SP 型と AN 型の統合意義特徴として下記の傾向がみられるとしている。

〔S 型 (=SP 型) : T 型 (=AN 型)

ものの機能 (動作・動態) : ものの構造・特徴 (静態)〕⁽¹⁴⁾

本稿ではこの傾向を【SP 型 : 機能】【AN 型 : 構造】として、以下の意義素の共起制限考察に際し、検討すべき要素に加えることにする。

(2) 【表1】 語義I調査を通して確認できる“清楚”の意義素

語義I調査：□内の語彙は類義語扱い

【表I】

	清楚 AN:SP	分明 AN:SP	明白 AN:SP	明確 AN:SP
頭腦	チ cw : エチ cw	:	:	:
腦子	:	エチ ycw	:	:
腦袋	:	w ②	:	:
神志	c ① : エチ ycw	:	:	:
記憶力	:	———— “很好” “很强” ————		:
腦筋	:	エ ycw	:	:
思路	チ yc : エチ ycw	:	:	エ c ③ : c ③

①他还有较清楚的神志，不要担心。(ぼけてはいない)

②多数意見：“腦袋”，身体部位そのものをさす。(四川方言では使える)

③他具有明確的思路。(考え方に個性があって、その人らしさがはっきりしている)

在这个问题上，他有明確的思路。(考え方に筋が通っている)

他考問題，思路明確。(考え方に筋が通っている)

多数意見：第一の連想語彙は“思路敏捷”。“敏捷”は“動作”“辦事”と結びつき、スピードの速いことを表示する。文章を評価する場合などには、“這篇文章思路清晰”を使う。

【類義語への少数意見】

“頭腦”の連想語彙としては“清晰”が第一に挙げられるので，“清楚”との組み合わせは認めにくい(Y)；“腦勁笨”しか思いつかない(チ)。

【類義語の連想語彙】

“動腦子／腦勁”は○，“動頭腦”は※。

“用腦子”は○，“用頭腦／腦勁”は※。

“沒頭腦／腦子”は○，“沒腦勁”は※。

類義語の“頭腦”と“腦子”について、大滝 1995 p 195 では、次の指摘がある。

「“頭腦”と“腦子”の区別は、機能とその機能を果たす器官(or 機関)と捉えられる。“笨”も基本的には(頭腦プレイ、手仕事があまくできない)意

味を表示するが、一方、(器官がうまく機能できない) という構造上の特徴も表す。]; 具体例を本稿で補充したうえで、“頭腦”“腦子”の示差的特徴を記述し、語義の面から“清楚”との共起制限のありかたを検討する。

※ AN 型“不靈的頭腦”に対し、SP 型“頭腦不靈”は、必ず“他(的) 頭腦不靈”という主語への限定を加えた上で成立し、(頭の回転がのろい“不聰明”)という個人の【属性】を表現する。この“頭聰不靈”のような SP 型を大滝 1995 では【述部担当 S 型】という分類名をつけ、通常の【主題+陳述】という文としてのゲシュタルトを構成できない SP 型、すなわち統合型レベルにとどまる形式として区別した。

SP 型“腦子不靈”は(なかなか理解することができない)などの具体的な場面をよく用いられる意味を表すが、※ AN 型“不靈的腦子”は不可。(ただし、インフォーマントによっては“不靈的頭腦”の方は文学的表現として認め得る、とする。“遲頓的頭腦”も可。)

SP 型“頭腦笨”に対し、※ AN 型“笨的頭腦”、?? “很笨的頭腦”。“他(的)頭腦笨”は“他很笨”と意味領域を同じくする。すなわち“笨”は、人間の能力への判断であり、人間への評価を表す。AN 型が通常は“很笨的人”となることは、【述部担当 SP 型】のうち、“他性情倔強/頑固/固執”などが AN 型“倔強/頑固/固執的人”となること、“他精神/態度/為人爽快”などが AN 型では“爽快的人”になることと並行した言語事実である。そこで“頭腦”は「人間に付帯した精神機能」を表すと考えることができよう。

AN 型“(很)笨(的)腦子”は“我真是個笨腦子!”などのように自他を問わず罵りの感情を向けていることを表現する。被修飾語を“腦子”とする AN 型が人間の分類に用いられるということは、“腦子”が物体相当の器官を表すためと考えられる。“笨手笨脚”(不器用である)、“笨口拙舌”(口べたである)など身体部位を用いた表現と並行

するものであり、SP型“他(的)脳子笨”も“他(的)嘴/手脚笨”と同様に用いられていると考えられる。

上記の検討により、“頭脳”と“脳子”の意義素の示差的特徴を、「理解能力=人間に付帯した精神機能」と「人間の能力を生み出すための器官」の対立として捉えることが出来よう。

したがって、【“清楚”語義Ⅰ】が「人間が理解能力という点で優れているという属性」を表示するがゆえに、精神機能を表わす“頭脳”を判断対象格の格補填語としてとり、AN型のなかでも「格関係で結ばれた連体修飾統合」を構成していることを示すと解釈できる。この点、“清楚の思路”も同様に解釈できよう。一方、“脳子”“脳筋”は精神機能を弁別的特徴とする語彙ではなく、物体としての器官を弁別的特徴とするがゆえに、SP型の【SP型：機能】という統合意義特徴が加えられて初めて、「器官が生み出す機能(“脳子”“脳筋”)の間の示差的特徴については論じない=思考力】が【“清楚”語義Ⅰ】と呼応するものとして、通常の語義的意義特徴の束の中からクローズアップされ、その結果、意味的ゲシュタルトとしての統合が成立するものと解釈できる。

大滝1995 p186では、上記のごとく、統合意義特徴がその統合型内成分である二つの単語の語義的呼応に与える影響に次の2種類があると仮定している。仮定の表現を一部書き換え引用する。

【単語どおしの統合を妨げる、マイナス方向の影響を与える】

ある統合型に入ろうとする二つの意義素のうち、どちらかの文法的意義特徴または語義的意義特徴に対して、統合意義特徴がそれらと共に起できない規定を含む。

【単語どおしの統合を容易にする、プラス方向の影響を与える】

そのままでは共に起できない二つの意義素のうち、どちらかの文法的意義特徴または語義的意義特徴に対して、統合意義特徴がそれらが共に起できるようなクローズアップ効果または他の意義特徴を加える。

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴

統合意義特徴からの前者の影響を「妨害影響」と名付け、後者の影響を「促進影響」と呼ぶことにする。この仮定のうえにたつならば、統合意義特徴【SP型：機能】は“腦子”と“清楚”の統合に対し、クローズアップ効果を加えることにより、促進影響を与えたと解釈できる。

2.3.2 “清楚”語義IIの分析—形容詞的特徴と動詞的特徴

語義II調査：□内の語彙は類義語扱い

【表II-①】

	清楚 AN : SP	分明 AN : SP	明白 AN : SP	明確 AN : SP
問題	YC① : YCWエチ①	:	Cチ⑥ : YCエチ	YCエチ : YCエチ⑬
意思	YCWチ : YCWエチ	:	YCチ : YCWエチ	YCエチ : YCエチ
目的	CWチ : YCWエチ	:	: Yエ⑦	YCWエチ : YCWエチ
動機	CWエチ : YCWエチ	:	: エ⑦	YCエチ : YCエチ
想法	YCWチ : YCWエチ	:	⑧ : YCWエ⑦	YCチ : YCチ
看法	Y② : Y②	:	:	YCWエチ : YCWエチ
態度	: C③	: Y④	: Yエ⑦⑨	YCWエチ : YCWエチ
情況	YWチ : YWエチ	:	: Y⑨	Yチ⑩ : チ⑭
事情	YCWチ : YCWエチ	:	YCWエ⑧ : YCWエチ	Yチ⑫ : チ⑬
内容	YCWチ : YCWエチ	: Y⑤	Cチ : YCエチ⑩	Cチ : CWチ⑮

辞書類が掲載する典型的統合、最も連想しやすい語彙どおしの組み合わせを分析することにより、本稿では【“清楚”語義II】として「人間が事柄を正確に理解しているという〈精神過程〉を表示する」を設定してきた。この〈精神過程〉という術語は中谷 1995⁽¹⁵⁾の祖型述語〈状態・過程・行為〉の概念の中の〈過程〉を援用したものである。すなわち、本稿では、【“清楚”語義II】を、

動詞が含む文法的意義特徴の典型である「行為」と形容詞が含む文法的意義特徴の典型である「状態」との中間的概念、「過程（そのなかでも、人間の精神過程）」という文法的意義特徴を含む、知覚・思考動詞としての語義であると解釈する。なぜならば、語義IIでは“清楚”に中国語学では通例として動詞の文法機能とされる「賓語をとる用法」と、形容詞の文法機能とされている「“很”で修飾され、かつ賓語をとらない用法」とがあらわれるからである。文法的機能を異にするとはいえ、この2種類の用法に共通する語義はあまりにも近似的であり、やはり意義素内に「動詞の特徴（動詞としての意義特徴）」と「形容詞の特徴（形容詞としての意義特徴）」とが、ある相関関係を保ちつつ共存していると考えなければならない。

そこで、“清楚”シソーラスとどの名詞との組み合わせについて検討するかには考慮をはらわねばならないが、大滝1999によれば、このような〈精神過程〉を形容詞的用法でさえ最も顕著に示すのが“明確”だと考えられる。そこで、語義IIの調査用にとりあげる名詞は、“明確”と組合わさり易い名詞を選ぶことにした。

“清楚”（【表II-①】内の注①～③）

①這是一個很清楚的問題，你還不懂？

多数意見：SP型でのみ、まくら言葉のように使う。

問題很清楚，我們就這樣做。（問題箇所はハッキリしている…）

述語として“很清楚”を使っても、文として言い切れない。

你的問題（查）清楚了。（社会的背景＝名譽回復を連想させる）

②他對那個問題（的）看法很清楚。

他表明了對這個問題的清楚的看法。（平叙の陳述に限る）

「個別の具体的問題についての“看法”」という限定が必要。

多数意見：連用修飾統合型A地V型をとる。

請大家清楚地表明看法！（命令・要求の陳述）

他們已經清楚地表明了看法。(平叙の陳述)

【類義語“看法”“想法”の用法の違いに基づく“清楚”シソーラスの語義検証】

“看法”は、各個人に特有のものの考え方を表示する。例えば；群衆有個看法。(政治的標語の一つ；群衆には批評眼がある)

本稿の語義分類では、“看法”は〈個人の精神的属性〉を表し、確定した状態を表すとみなせる。“看法”が“清楚”と結びつかない理由としては、「“看法”が“清楚”であることは自明の理である。“清楚”を形式的に加えても、意味的には何も言っていないに等しい」という内省報告が、的を射た語感を表すものと考えられる。A地V型の統合で“清楚地表明看法”が成立するのは、状語としてならば“加點兒清楚”という意志的行為が表現できるためであろう。“明白”はもともと曖昧な事柄に対してしか使えないので、“看法”と共にできないと考えられる。

また、“明確”が“看法”を判断対象にする場合、“明確”が何をコトサラに確定的とみなすかについては、次のような常套表現が参考になる。

我方的看法很明確：臺灣是我國的一部分。

すなわち、「様々な意見と対比して、なお揺るがない考え方」という、対比することを前提とした判断を表す。日常会話での典型的な場面背景にも同一の対比前提が見いだされる。

大家的看法很明確，我就不多說了。(說也沒用)

それに対し“想法”は、人がプランをたてる一時的な考え方を表示する。

在會議上，我有個想法。(ある提案がうかんだ)

※我有個看法／思路。

本稿の語義分類では、“想法”は〈精神的生産物〉を表すので“明確”とも統合するが、比較的外からの視点(発言内容を見聞きする、など)で容易に判断できるため、“清楚”が多用される。

③他們態度很清楚，沒什麼再商量的。

(離婚協的をすすめる場合など、どんなに紛糾していても結論がはっきりしていることが、様子で(私には)ワカル)

多数意見：“清楚”が“態度”と組合わさらないのは，“態度”が本人に“表明”されてはじめてワカルものであり、本来“模糊”な姿をした属性だからではないかという内省報告があった。離合詞のなかの“表態”という連想のありかたも、この内省報告を裏付けると考えられる。

“分明”（【表II-①】内の注④⑤）

④幾個人中、他的態度最分明。

⑤楊光氏（符号 Y）の語感：“分明”については他の人と違った感覚があるのかも知れない。自分は“特別清楚”くらいの感覚で使う。

“明白”（【表II-①】内の注⑥～⑩）

⑥這是一個很明白的問題，沒甚麼再商量了。（主觀的にすべて理解できる）

不明白的問題（わからない問題）有嗎？“明白”の動詞用法とみなせる。

⑦エの語感：○○明白了。……“了”が必要。

○○“我明白了”（○○について疑問だった部分が、ワカッた）

という“明白”の動詞用法；○○=目的，動機，想法，態度

⑦の表現は、SP型の統合意義特徴によって統合が促進された例とみなせる。すなわち、そのままでは共起できない二つの意義素のうち、どちらかの意義特徴に対してSP型の統合意義特徴が規定を補足して、二つの単語を共起させていると考えられる。AN型では統合が成立しないからである。

この⑦の用法では〈話し手を表す“我”〉が補足されていると解釈できる。

【類義語の分析】

“情況”は、ある時点での一時的な場面の状況である。

“事情”は、ある一連の過程を内在させている事柄であり、時間的制限は受けず、その実態を思考の対象として扱うこともできる。

したがって、“事情的情況”“事情の經過”という統合が成立する。

⑧ “想法”とは共起しやすいのは、判断形容詞としての“明白”が、「事柄の全貌」を取り上げようとするため、“想法”を「思考過程(=プラン)すべてについて把握する」という判断対象にとるからと考えられる。

“看法”は表現されさえすれば、考える必要もなくわかってしまう事柄のなであろう。“事情”と共起しやすく“情況”とは共起しないのも、同様の語義的共起制限によると考えられる。

⑨の語感：○○很明白。……“很”を入れなければSP型は不成立。

他的態度很明白。(嫌がっているなど、表明されない態度が話し手には“看透了”)

那里的情況很明白，不用再討論了。(話し手には、はっきりワカル)

多数意見：“態度”“情況”は考えなければワカラナイほど、難しい内容は含まず、示されさえすればすぐ理解できるので“明白”は使えない。

⑩多数意見：“明白”と“内容”の組み合わせは、「全体を通して」という文脈意義を加えると成立しやすい。(大滝 1995 での【述部担当 SP 型】)

這篇文章論點明確，內容明白。

したがって、AN 型“明白的內容”は成立しにくい。

“明確”(【表 II—①】内の注⑪～⑮)

⑪請把明確的情況告訴我。

⑬這件事情情況明確了，就這樣做。(少数意見：「確認できた」)

⑭多数意見“問題”：SP 型“您的經濟問題明確了，沒事兒了。”

……「(調査の結果) 答が確定された」という意味。“了”が必要。

“明確的問題”は“明確的回答/答復”と同一意味領域を表す。

……「答を確定してある」という意味を表示し，“問題”の属性を表してはいない。“清楚的問題”の不成立は、このためであろう。

⑮多数意見：考試的內容已經很明確了。

……「(決定権のある教師たちの会的などで) 内容が確定した」という状態変化を表す表現。“己經”と“了”が必要である。

⑫這麼明確的事情 (多数意見：“問題”の方が普通)，你們意然商量了三天，還沒有結果。

【表II—①】では“清楚”の類義語“明白”について、AN型では共起しないにも関わらず、SP型では文末に語気助詞“了”をつければ成立する組み合わせ(注⑦)が少数派ながら認められている。その意味が「話し手にはワカタ」であることから、知覚思考動詞の用法をもつことが推察される。AN型内の連体修飾語成分についても、それが判断形容詞としての語義を表す場合と、知覚思考動詞の語義を表す場合(注⑥)があるようである。また、“明確”は辞書に掲載される典型的用例にも賓語をとる動詞的用法が挙げられている。

そこで、次に【表II—①】の名詞を後置して、“清楚”“明白”“明確”(“分明”は組み合わせ無しとして除外)が動詞として述語賓語統合型(以下、「VO型」と略称する)の述語成分となるかどうかを調べて、動詞・意義特徴を検討する資料とする。以下、VO型の統合が成立する用例のみを挙げる。

【表II—②】

アンダーラインは“清楚”とVO型で組合わさらない単語を表す。

ただし“原因”は【表III】で扱う単語である。

?は少数派意見を表す。 : /は、言い替え可能を表す。

【清楚】“問題”“目的”“動機” ? “内容”:

“事情的經過”(※“事情”)“原因”

我真不清楚這個問題。

我很清楚您說的問題。

我不清楚他這麼做的目的/動機/原因。

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴

他很清楚這次工作的內容（／性質）。

……肯定形述語の賓語には SP 型が選ばれ易い。

我很清楚你要講什麼問題。

我不清楚他爲什麼來。

我很清楚自己的想法是錯的。

【明白】“問題”“意思”：“目的”“動機”“想法”？“看法”：

（V 了 O 型でのみ共起する） “情況”“內容”“原因”

他（很）明白 這個問題／你的想法／你的意思。

你 明白 他的目的／他做案的動機／？他的看法嗎？

……“目的”“動機”“看法”を賓語にするには疑問陳述で使うと使いやすい。平叙陳述ならば，“○○（我）明白了。”という SP 型優先という内省報告がある。

我們已經明白了工作的內容（／性質）／這種情況／事故的原因。

……“了”が着いた表現なら“內容”も使うことがある。

また，“情況”も複雑さを“這種”などで加えたならば使える。

【明確】“目的”：？“內容”

我們要明確學習的目的。

……“我們的任務”“前進的方向”などの賓語をとるスローガン用の表現がある。

？這次會議上明確了工作的內容。（“性質”“方針”が使いやすい）……“了”が着いて、かつコレカラ決定できる出来事についてなら，“明確了+O”の統合を使うことがある。

以上，【表II-①】【表II-②】の語義II調査の結果を比較すると，共起できる名詞グループの成員が異なっていることから，SP型とAN型の統合意義特徴の違い，さらにVO型と両者の統合意義特徴の違いが，単語どおしの統合の可否に影響を与えていることが明らかになった。したがって統合型内での用法

を資料として用いる、「相互呼応の作業原則」「同位置の作業原則」によって意義素を記述しようとする場合、その単語が含まれる統合型すべてを用いて分析を進める必要がある。そのうえで、語義的意義特徴を網羅していく作業がさらに必要となると考えられる。

そこで、【“清楚”語義Ⅱ】を中国語で表現するために中国語辞書で最も多く使われた“了解”を“清楚”の類義語として扱い、その意義素について、まず検討する。その意義素は、思考動詞としての“清楚”シソーラスの動詞的特徴と共通する、多くの意義特徴を有すると予測されるからである。

“了解”は、【表Ⅱ-①】の名詞すべてと以下のようにVO型を構成する。

【表Ⅱ-③】

アンダーラインは“清楚”とVO型内で組合わさらない名詞を表す。

+ “原因”は【表Ⅲ】内の名詞（“明確”と組合わさらない）

／は、言い替え可能を表す。

【了解】“問題”“目的”“動機”

“想法”“看法”“意思”“認識”“態度”

“情況”“事情的經過”“工作的內容”：+ “事故的原因”

我了解了解／很了解

—— 這個問題／這個目的

／他的動機／他們的想法／他們的看法

／他的意思／他們的意見／大家的態度

…… “了解”は、“理解”と組合わさる“委曲”“難處”などを格補填語に使えない。

“理解”は、“了解”と組合わさる“意思”“認識”“態度”を格補填語には使いにくい。

“了解”の用法と“理解”の用法の違いから、人間の深い精神

的特質は“了解”の知識獲得の対象にならないことがわかる。

上記の例文中での“了解”の意味は，“了解了解”という動詞重畳形をとる場合、「実体を知ろうとして、調査する〈出来事〉」という完全な行為動詞の意味になる。主語の位置にくる有意志者は〈動作主〉の格を補填している。

また“很了解”という程度副詞と組み合わせた統合形式では、賓語を後置したVO型においても，“對○○（人物）很了解。”という一見すると形容詞的統合においても、ともにその人物が「十分な知識をもっている〈精神状態〉にある」という意味を表す。そして主語の位置にくる有意志者（人物）は、具体的行為を実行するかしないかを問われることのない、〈経験者〉の格を補填するものとみなせる。この〈経験者〉という格は、感情形容詞・感覚形容詞の格としても扱われるものであるため⁽¹⁶⁾，“對○○（人物）很了解。”という形容詞的統合も成立しやすいと考えられる。

以上、【表II—①】【表II—②】【表II—③】の調査結果から、語義IIを分析するためには、意義素の意味的事項も、判断形容詞の意味的事項（判断対象：判断方法：判断結果）だけではなく、知覚・思考動詞の意味的事項⁽¹⁷⁾（経験者：思考行為対象：思考方法：思考内容、思考生産物、思考原因など）も用いる必要があると予測できる。そこで、まず，“了解”の意義素は基本的に思考行為動詞であると設定し、その動詞的特徴がどのように形容詞的特徴と関連するかについて考察した。

その結果、本稿では以下のように“了解”の意義素を記述することにした。

【“了解”の意義素】（①～⑥は、意味的事項を表わす）

- ①思考行為対象：他者が外見からも判断しやすい事柄
- ②動作者がとる思考方法（流相）：調査を行うという行為
- ③動作者の思考生産物（異相）：内的直接経験⁽¹⁸⁾としての知識

この、「了解」の意義素の骨格となる思考動詞としての用法以外に、形容詞的用法、すなわち「很」の修飾を受ける用法では、意義素内でもその語義が形容詞的特徴からの影響を受け、意味的事項を次のように変化させる。

④「動作者」が具体的行為の能力を抑圧されて、「経験者」となる。

⑤思考方法②が抑圧されて流相での規定が排除される。

⑥異相での思考生産物③が「経験者の精神状態を表す内容」として、「不定人称者による判断結果」という意味的事項の規定とされる。

すなわち、形容詞・意義特徴を有する「了解」は、人間を形容する形容詞ではあるが、その表示する〈性質〉は感覚感情ではなく、思考のあり方である。

2.3.3 “明白”“明確”と“清楚”の意義素記述

前項で記述した“了解”の意義素で見られるような、「思考行為動詞と判断形容詞としての意義素が、内部で相互に関連しあう多義の構造」が“清楚”“明白”“明確”にも成立していると予想される。しかしながら“了解”が具体的な行為パターンである「調査すること」を表示する行為動詞でもあるのに対し、“清楚”“明白”“明確”は具体的行為には触れることのない、精神活動のみを表す思考動詞である。そこで、「動作主」に考慮をはらう必要がなく、動詞としても「経験者」の意味的事項のみを記述する点が“了解”の意義素記述とは異なってくる。前項までの調査資料とAN型SP型の統合意義特徴の記述、および“了解”の意義素記述の手法を使って、【“清楚”語義II】の意義素を“明白”“明確”の意義素と比較することにより、その弁別特徴と示差的特徴をあきらかにしていく。

まず、“明白”の思考動詞としての意義素を大滝1988.を参考に記述し、形容詞的特徴が思考動詞の語義とどう異なる形容詞的語義を含ませるかを検討するとともに、“明確”の意義素についても、大滝1999.での形容詞としての意

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴

義素記述に基づき、思考動詞の特徴がどのように派生するかを検討し、どのような多義構造をもつか考察する。この考察は、のちにVA型、V得A型、A地V型の統合意義特徴を検討するさいに、統合意義のなかから語義的特徴を排除するのに効果を発揮するものと予測される。

【“明白”“明確”の意義素内の思考動詞の特徴と形容詞の特徴】

アンダーラインは意味的事項を表す。

>

意味的事項の下に形容詞、動詞という表示は、意味的事項の所属を表す。

★☆☆□は、動詞の特徴（星形）と形容詞の特徴（四角）についての“明白”と“明確”の示差的特徴を表す。

①～⑤は、注釈番号を表す。

	“明白”	“明確”
判断者 形容詞	不定人称者①として、ある事柄②の全貌■を、客観的かつ明らかに把握できるかどうか、を自問する	不定人称者として、ある事柄の状態が確定的な方向へ変化するかどうか□を、確認しようとする
判断対象③ 形容詞 (主語の位置で表示される格)	不定人称者がある事柄の全貌に対して抱いた疑問が、明らかに解かれた度合い(格補填語：疑問を生じさせた全貌が曖昧な事柄■)	ある事柄の状態が確定していく方向にあるかが、確認された度合い(格補填語：確認されるべき不確定な状態の事柄□)
経験者 思考動詞 (主語の位置で表示される格)	(思考を始める前の平相において)ある事柄の内実や実態★に対して疑問を抱く(格補填語：有意志者)	(行為を始める前の平相において)ある行為の方向性☆を確定させる目的意識をもつ(格補填語：有意志者)
判断方法 形容詞	帰属度スケールを用いて、格補填語内に見いだされる判断対象を判断する	帰属度スケールを用いて、格補填語内に見いだされる判断対象を判断する

判断基準 形容詞	不定人称者にとって、事柄の客観的全貌を明らかに示すイメージを、典型基準 ⁽¹⁹⁾ として優先的に用いる	不定人称者にとって、その事柄の確定をした状態を示すイメージを、典型基準として優先的に用いる
思考方法 思考動詞	事柄の内実や実態について疑問に対する正解を見いだそうとして考える	不明な箇所を明らかにして、行為に確定的な方向性を与えようとして考える
判断結果 形容詞	事柄の全貌を客観的かつ明らかに把握できたと判断する	不明な箇所のない、確定した状態が確認できたと判断する
思考行為結果 思考動詞	(異相において) 疑問に対して納得のいく正解を得る	(異相において) 行為の方向性を確定させるのに成功する

①不定人称者；言語形式で表示されることのない、意義素内の認知活動を行う「人格者（有意志，無意志）」。その事柄物体を判断対象などに取り上げるのは何故か、という認知活動の角度・視点を記述するために設定した、「空の人格者」である。

②事柄；「物体」に対立する概念。日本語でも中国語でも基本的表現形式は動詞の単独（原形）用法。ただし語義によっては、名詞表現もありうる。（例：出来事，“事情”）

③判断対象と格補填語とを分けて記述する理由

；判断対象は常にあるベクトル量で計れる状態（時に過程）である。それに対し、格補填語は「そのベクトル量を、語義的意義特徴として含む意義素を表示する単語（統合形式）」。

VO型の賓語の位置で表示される格をまとめて記す。（思考動詞の用法）

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴

意味的事項	“明白”；思考原因（平相） (経験者に) 疑問を生じさせる, 内実や実態のわかりにくい事柄★	“明確” 思考行為対象（平相） (経験者が) 行為の方向性を確定しようとする場合に必要とされる要件☆
【表II-②】参照	(格補填語=N/AN型：思考原因になる事柄は, 判断対象よりも幅広い)	(格補填語=N/AN型：“目的”“方針”“任務”などで, 判断対象より大幅に限られる)
	(格補填語=SP型：vp型 経験者が抱いた疑問点を, 疑問代詞を用いて指定する判断叙述④)	(格補填語=SP型：経験者が経験者が確定しようとする要件を, 疑問代詞を用いて指定する判断叙述)
	“明白” 思考生産物⑤異相 (経験者が) 考えたすえに見いだした正解 (格補填語=SP型の判断叙述)	X

④判断叙述：話し手ではなく、第一人称者によってなされる判断の叙述。

“不”による否定，可能・義務，条件結果：

“是”による同定，習慣，因果関係など。

疑問詞の不定用法によって，判断箇所だけを示す叙述も含む。

文として言い切る場合には，「真理」に拠って述定される文にも，「現実」に拠って述定される文にもなる。

“明白” 我明白了對面是誰家的院子。

我們才明白他怎麼不來。

“明確” 我明確了這次任務的目的是什麼。

⑤思考生産物；正解は考えるという過程を経て，異相で初めて獲得できる。

“明白” 我才明白全是表揚信。

大家心里都明白他總要欺負人。

上記の意義素記述に拠れば、統合型の統合意義特徴と単語の意義素の相互干渉という観点から、【表II-①】の“明白”（注⑦）を解釈することができる。

“明白”が、AN型では統合せずSP型でのみ統合可能な名詞はSP型の主語の位置で、判断対象格ではなく思考原因格を補充している

SP型内でのP“明白”とSの名詞との格関係3種 (a. b. c)

- a. S (判断対象) + P (判断形容词)
【表II-①】
- b. <“對”> O (思考原因) + S (経験者) + P (思考動詞) 語気助詞“了”
【表II-②】
- c. S (経験者) + P (思考動詞) <+O (思考原因) / O (思考生産物)>

経験者格は、話し手“我”によって補填されると省略しやすくなるのは、中国語でも日本語でも共通した叙述の特徴といえる（本稿では「定説」とみなし、改めて論じることをしない）。

また、上記の意義素記述に拠れば、【表II-①】の“明確”と“問題”の統合意義がAN型とSP型とで異なること（注⑬）（同様の統合意義の変化が“清楚”と“問題”の組み合わせにもみられること（注①））を、次のように解釈できる。

※少数意見：“明確の問題”は不成立である。“回答”とのみ共起する。

多数意見：AN型では“問題”は「回答が確定している疑問点」を表す。

這個明確的問題是老張，老劉商量後提出的，他們讓我盡快回答，以免事情鬧大。（回答がすでに明かである）

這麼明確的問題，你還要我解釋嗎？到考試的時候要比這個難得多，你怎麼辦？（回答がわかりきっている）

すなわち“明確の問題”という統合形式は、AN型の統合意義特徴である「被修飾語Nの〈属性〉を判断する」が促進特徴として機能し、本来結び付けられようのない“問題”と“明確”の統合を可能にしたと解釈できる。すなわち、“問題”の意義素の弁別の特徴である「回答を求める」語義特徴内の要因であり、かつ「確定していることが確認できる」性質を属性としても包含できる、個別の“回答”を、“問題”の意味領域の中からクローズアップして“明確”と共にさせたと解釈できる。このようなAN型の統合意義特徴を、本稿では【AN型属性】と名付ける。

一方SP型では“問題”は「解決方法（回答）を求める課題」を表す。

這個問題非常明確，它不是讓我們算出數據，還是讓我們提出個可行方案。

（この課題は解決方法が明かであり、それは…）

すなわち，“問題明確”というSP型は、解決方法をひきつづき叙述せねば文になれず、【発句の句】としての文法機能をもつといえる。中国語では、正常な格補填がなされなかった統合は、格を補充する叙述が完結するまで、文として言い切れないと考えてよい。“問題明確”で最も簡便に格補填を達成する変更方法は、SP型をSS'P型として、S'P型に正常な語義呼応を示す格補填語を埋めればよい。例えば，“這個問題答案非常明確。”

このようなSP型の統合意義特徴を、本稿では【提題担当SP型】と名付けることにする。

これまでの“明白”“明確”の意義素およびAN型とSP型の統合意義特徴についての分析を参考にして、最後に【“清楚”語義II】の意義素記述を行う。その意味的事項ごとの規定（語義的意義特徴）を記述すると同時に、すでに輪郭を記述した【“清楚”語義I】と、これから具体的言語資料を挙げる【“清楚”語義III】との関連についても検討をすませることにする。

【“清楚”の意義素内の思考動詞・意義特徴と形容詞・意義特徴】

アンダーラインは意味的事項を表す

二重アンダーラインは語義IIと語義Iまたは語義IIIとの示差的特徴を表す。

①②は、注釈番号を表す。

	“清楚” 語義II	“清楚” 語義I；語義III
判断者 形容詞	<u>不定人称者として</u> 、ある事柄と他の同種の事柄を区別する示差的特徴が容易に見いだせるかどうか、を自問する	語義I；（ある有意志者がその思考力を発揮して 語義I III；事物（事柄と物体）
判断対象 形容詞 （主語の位置で表示される格）	<u>不定人称者が</u> 、ある事柄の内部に示差的特徴を、容易に見いだせる度合い （格補填語： <u>見いだしやすい示差的特徴をもつ事柄</u> ）	語義I；ある有意志者がその思考力を発揮して 語義I III；事物 （格補填語：語義I；有意志者の思考力 語義III；見いだしやすい示差的特徴をもつ事物）
経験者 思考動詞 （主語の位置で表示される格）	（思考を始める前の平相において）ある行為に関する事柄①の示差的特徴を見いだそうとする（格補填語：有意志者）	<無規定> ②
判断方法 形容詞	帰属度スケールを用いて、格補填語内に見いだされる判断対象を判断する	<同左>
判断基準 形容詞	不定人称者にとって、 <u>事柄の示差的特徴が明らかになったイメージを</u> 、典型基準として優先的に用いる	語義I；有意志者の思考力が充分発揮されたイメージ 語義III；事物の示差的特徴が明らかになったイメージ

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴

思考方法 思考動詞	ある行為に関する事柄の示差的特徴を見いだそうとして、詳しく観察する	<無規定>
判断結果 形容詞	不定人称者が、ある事柄の内部に示差的特徴を容易に見いだせたと判断する	語義 I ; ある有意志者がその思考力を発揮して 語義 I III ; 事物
思考行為結果 思考動詞	(異相において) 行為に関する事柄の示差的特徴を見いだす	<無規定>

①行為に関する事柄；「精神活動に関する事柄」「非人為的事柄」に対立する概念。名詞表現のうち、「問題」「目的」「原因」「事情的経過」は行為に関する事柄であり、「事情」「情況」「内容」は非人為的事柄である。「意志」「想法」「態度」は精神活動に関する事柄である。この規定によって、【表II-①】で「清楚」とAN型SP型で共起する名詞のうち、【表II-②】でVO型の賓語となるものとならないものが区別される。

②無規定；「規定がない、すなわち語義的意義特徴が含まれず、その意味的事項に関する意味を表示も指示もできない」こと。

対立概念である「有規定」は、「弁別的特徴でも示差的特徴でもない語義的意義特徴があり、現象素⁽²⁰⁾の中の一部領域を指示できる」こと。服部 1988. で、語義的意義特徴を+-で表記する記述法がとられていた時に、双方とも表せることを表記するのに用いられた「中和」という概念に類似した概念が「有規定」である。

VO型の賓語の位置で表示される格をまとめて記す。(思考動詞の用法)

意味的事項	；思考行為対象(平相存在)	；思考生産物(異相出現)
	(経験者が) その示差的特徴を見いだそうとして観察する行為に関する事柄	(経験者が) 観察したすえに見いだした, 行為に関する事柄の示差的特徴
【表II-②】参照	(格補填語=N/AN型: 思考行為対象になる事柄は, 判断対象よりも限られる)	
	(格補填語=SP型またはvp型: 行為に関する事柄の示差的特徴となる箇所を疑問代詞で指定する判断叙述)	(格補填語=sp型: 示差的特徴となる箇所を, 焦点として叙述する判断叙述)

上記の意義素記述を鑑みるに, 【“清楚” 語義II】の判断形容詞としての語義は, 語義IIIと密接な関係にあることがわかる。判断者, 判断対象, 判断結果に記述された語義IIの「事柄」という規定を「事物」へと拡大するならば, 他の規定は語義IIIとすべて共通するものとなる。したがって, 語義IIを語義IIIから分けて検討した理由は“明確”の判断対象についての規定である, 「不確定な状態から確定した状態へ変わりうる事柄」という観点から語義IIの判断対象がしぼられていたためにすぎないと考えてよい。

語義Iは, 判断対象である思考力を表す名詞をSとするSP型が【述部担当SP型】であり, “清楚”を述語として文を構成するためには, 必ず「思考力を有している, 有意志者」を更なるSとして前置せねばならない。それは「人間の属性としての思考力を判断する」語義であるためと考えられる。

他頭脳/思路很清楚。(頭脳/思路很清楚, ……)

それに対し, 思考動詞としての語義IIは,

- (1) 主語の位置の経験者格が「有意志者」によって補充される。

(2) 思考行為対象が「行為に関する事柄」に限られる。

の2点で、他の判断形容詞としての語義と大きく異なる。

本稿では、以下の考察から語義Iを排除する。そして語義IIとIIIでの判断形容詞としての語義と、語義IIで考察した思考動詞としての語義とを続けて研究対象とする。前者を“清楚a”，後者を“清楚v”と表記することにする。

2.3.4 上記意義素の“清楚”語義III言語資料に対する説明能力

前項で規定した“清楚a・v”および(同様の表記法で)“明白a・v”“明確a・v”の意義素により、以下の名詞との共起制限のありかたがどのように説明できるかを検討し、その説明能力を検証する。

語義III調査

【表III】

	清楚 AN : SP	分明 AN : SP	明白 AN : SP	明確 AN : SP
倒影	YCW エチ : YCW エチ	:	:	:
聲音	YCW エチ : YCW エチ	:	:	:
字跡	YCW エチ : YCW エチ	: Y	:	:
設計圖	YCW : YCW	:	:	:
原因	YCW チ : YCW エチ	:	: Y エ③	:
印象	YCW エ : YCW エ①	: YW エ②	:	:

①多数意見：那件事還沒有忘記，印象很清楚。(客観的描写という語感あり)

那件事難以忘記，印象很深刻。(主観的描写という語感あり)

②多数意見：那件事過去十年了，可還是印象分明。

(文学的色彩を帯びる；“鮮明”であるという語感)

③少数意見：“了”を加えて成立。この統合での“明白”は思考動詞。

“倒影”“聲音”“字跡”は、視覚聴覚を通して観察できる「物体」範疇。

“設計圖”は視覚で観察しうる他、思考の対象ともなる「物体」。

したがって、すべて判断対象の規定として「複雑な内容」を要求する“明白”とは共起しない。また「事柄」が確定するかどうかという方向性を取り上げる“明確”とも共起しない。

“原因”は行為に関する事柄。平相から一貫した状態の思考行為対象であり、実態がわかるのには思考力が必要なので思考動詞“明白”と共起する。しかし、実態そのもの（正解）は変化するものではないので、“明確”とは共起しない。

“印象”は精神活動に関する事柄。記憶は直接体験的な感覚なので、“明白”の判断対象にも思考対象にもならない。また通常、不確定の方向へしか変化しないので“明確”とも共起しない。

上記の解釈は“明白”“明確”について記述した意義素が「【表Ⅲ】中の名詞が“清楚”としか統合しない理由」を合理的に説明しうることを示すといえよう。

3 形容詞“清楚”と動詞を組み合わせる統合意義特徴

3.1 VA型・V得A型・A地V型の統合意義特徴検討の手順

本稿では次の手順でVA型・V得A型・A地V型の統合意義特徴を求めることにする。

- (1) 判断形容詞“清楚 a”と思考動詞“清楚 v”を、意義素記述の完了した“明白 a”“明確 a”あるいは“明白 v”“明確 v”と随時対象しながら、VA型・V得A型・A地V型の中でどのような動詞と組合わさるかを調査する。
- (2) その統合意義の中から、形容詞と動詞の意義素を取り除くとともに、動詞が文中の主語の位置および賓語の位置に、それぞれどのような格補填語を備えているかを検討する。

(3) 本来、それ専用の格補填語によって表現されるべき判断形容詞の判断対象格が、動詞の格補填語で重複表現されているかいないかについて検討を加える。重複表現されていない場合は、文中のどの語句を格補填語としているかを統合意義から分析する。また、言語形式で直接表現されず、メトニミー表現などを用いて判断の対象が表現されている場合は、格補填語に擬されている表現を、「疑似格語義」として記述する。

(4) さらにまた、統合の仕方が文全体の意味（すなわち、「叙述内容」+「述定」+「伝達」）からどのような影響を受けるか検討する。

本稿では、上記手順の(4)の段階までで見いだされた次の3つの言語事実が、統合意義特徴の具体的な現れであると仮定して、論を進めることにする。

【VA型・V得A型・A地V型の統合意義特徴の区別を示す言語事実】

【1】動詞および形容詞の格補填語の種類と、置かれる位置

【2】疑似格語義をメトニミー表現やメタファー表現する言語形式の種類

【3】その統合型が使われ易い、文の発話意図の区別（疑問・平叙・命令）

3.1.1 調査資料の作成方法

《漢語動詞—結果補語搭配詞典》北京語言学院出版社 1987 の中から、以下の基本用例を選び、それぞれに(1)~(4)のような置き換えが可能であるかどうかについて、4名のインフォーマントに内省報告を求めた。

(1) “清楚”の用例 18 個と、その“明白”“明確”への置き換え

(2) “明白”の用例 11 個と、その“清楚”“明確”への置き換え

(3) “模糊”の用例 3 個と、その“不清楚”への置き換え

(4) “鬚塗”の用例 15 個と、その内 5 個の用例の“不清楚”への置き換え

さらに、上記の用例とその置き換え表現の中で使われた、本稿の V, A, O に当たる語句（単語またはフレーズ）に対してアンダーラインをひいて指示を

した。そしてそのV, A, Oに相当する語句が, VA型・V得A型・A地V型(以下,本項では「(動詞と形容詞を成員とする)基本統合型」と呼ぶ)の成員として使われる場合や,その上位統合型(基本統合型を内包する複合統合型)である“把”統合型,SP型,VA・O統合型などの9種類の統合型中で使われる場合について,その組合わさりかたと統合意義を調査した。

なお,この9種類の上位統合型内のSとOの符号は,動詞または形容詞の格補填語として設定され,文法的位置を表すものではない。Sは判断対象格,動作主格,経験者格を補填する語句であり,Oは思考対象格,思考原因格,思考生産物格,行為対象格を補填する語句である。

主語の位置にOが来ている場合,通常のSP型すなわち主語述語統合型の上位統合型である,主題陳述統合型(以下,「単文型」と略称する)が成立するものと考えことにする。A地V型が,「O補填語が主語の位置にきた単文型を上位統合型としてとれない」という言語事実は,A地V型の統合意義特徴がVA型とV得A型の統合意義特徴とこの点で示差的特徴を有することを示す。(具体的規定は後に検討する)

【用例調査に用いた9種類の複合統合型】

【VA(述語結果補語)統合型】

【VA1】 O VA

【VA2】 S 把O VA

【VA3】 S VO VA

【VA4】 S VA O

【V得A(述語様態補語)統合型】

【V:A1/A'1】 O V得(很)A/AA(=重疊形)的

【V:A2/A'2】 S 把O V得(很)A/AA(=重疊形)的

【V:A3/A'3】 S(V)OV得(很)A/AA(=重疊形)的

【A地V(状語中心語)統合型】

【AV 1/A'V 1】S 很 A/AA 地 V (～) O

【AV 2/A'V 2】S 把 O 很 A/AA 地 V (～)

インフォーマントへ出した内省報告のための具体的な指示は次の通りである。

この形式で文ができるかどうかを、チェックして下さい。

- (1) ごく普通の表現として言い切れる (自分も使う) 場合 → ◎
ある特別な文脈でなら、自分も使うかも知れない場合 → △
(その文脈や場面が理解できるように、例文を詳しく書いて下さい)
文法的にも絶対こういう言い方はしないと思う場合 → ※
- (2) もし、意味上の目的語 (=O) を取り替えたなら使える場合 →
(O=他の目的語; と書いたうえで、例文を書いて下さい)
- (3) AV 統合型では、V の後ろの位置 (～) に他の言葉をつけ加えると使いやすくなる場合、すべて例文を書いて下さい。

以上の手順で収集した約 1500 個の回答を、文法分析に有効な形で整理するには、まず動詞と形容詞の組み合わせに類別のあることが最も察知し易い統合型に注目することが効果的と予測される。そこで、一見していくつかのパターン分けができるのが【A 地 V 型】であったので、【A 地 V 型】内でどう使われているかをもとにして“清楚”と組合わさる動詞をおおまかに 6 種類に分けた。

(アンダーラインは、上記例文中にはなく本稿で補充した動詞を表す)

- ① 思考行為 V “了解” “認識” “知道” “記”
 “分” “想”
- ② 話す行為 V “問” “打聽”
 “説” “講” “談” “解釋”
 “表達” “表明”

- ③書く行為 V “標” “抄” / “寫”
- ④知覚 V “看” “聽”
- ⑤具体的動作 V “點” “數” “算” “查” / “洗”
“印” “蹭”
- ⑥抽象的行為 V “搞” “弄” “鬧” “摸”

本稿では紙幅の関係上、①についてのみ検討を加えることにする。

3.3 思考行為動詞と“清楚”の統合

文中で使われた“清楚”グループの意義素が判断形容詞を表示するか、思考動詞を表示するかは、統合のあり方に拠って選択されることが既に確認されている。本項では、中中辞典の語義解釈で言い替えに用いられた思考行為動詞，“了解”“認識”と“清楚”が組合わさった場合、どのような選択が行われるかをまず調査することにする。この調査で、思考動詞かつ判断形容詞“清楚”と、事柄名詞かつ思考行為動詞“了解”“認識”との間に存在する「思考に関する語義について、格補填語を選択する優先順位」が示されるはずである。本稿で

【表IV；“了解”“認識”との基本統合型】

“了解”“認識” →上段は名詞用法 (N)；下段は動詞用法 (V)

	清楚=A	明白=A	明確=A
	A的N : N很A	A的N : N很A	A的N : N很A
了解	YCWエチ : YCエチ	チ : Cチ	:
認識	YCチ : YCWエチ	:	YCWエチ : YCWエチ
	VA : V得A : A地V	VA : V得A : A地V	VA : V得A : A地V
了解	YCWエチ : YCWエチ : CWエチ	Cエチ : Cチ : Cチ	: :
認識	CWエチ : YCWエチ : YCWエチ	: :	CWエチ : CWチ : CWチ

は基本統合型に関する調査のみに基づいた分析結果を記述するが、他に上位統合型のO補填語として、“清楚”の語義分析にあたって使用した単語を6個(“清楚”グループの意義素を分析するにあたり、「格補填語となれるかなれないかが語義を区別するマークとなった」)ものである；“設計圖”，“他的住址”，“事情的經過”，“工作的內容”，“他的目的”，“他的想法”)を用いた調査もおこなった。以下，2種類の調査で共通した結論とみなせる論考のみを記述することにする。

基本統合型内での統合の可能性を，直観的に内省してみた場合の報告は【表III】にみられるようにほぼ全員一致したものであった。

3.3.1 “了解”との統合

以下，具体例をあげ，単文型の叙述内容全体を検討して“了解”の二つの語義「詳しい知識を持っている(★符号)」と「調査して内的直接体験としての知識を得る(☆符号)」，および“清楚”の二つの語義「有意志者が(行為に関する事柄について)示差的特徴を見いだしている」「物体や事柄が示差的特徴をはっきり示している」の，どちらが表示されているかを確認する。その後，“了解”“清楚”の格補填語(判断対象格，経験者，動作主格をS補填語と呼び，思考対象格，思考原因格，思考生産物格をO補填語と呼ぶ)を調べる。そして，各基本統合型の統合意義特徴の検討に入ることにする。

〈例1〉【名詞語義の“了解”と“清楚”の統合例】

☆他對這件事的了解 不很清楚。

(肯定文では“了解得很清楚”が普通：得ている知識があいまいである)

☆通過一個月的調查，他對那里的情況的了解可以說是很清楚(=徹底)了。

☆我們對新規定先要有一個比較清楚的了解。

☆對全局有一個清楚的了解是做出正確決策的前提。

☆他對這個問題的清楚的了解使他不_再寫繼續幹下了。

有助於問題的解決。

(原因結果の論理叙述に使われる：名詞用法は総じて“理解”の方が普通)
“清楚”が判定対象とするものは、「内的直接経験として得た知識の鮮明度(示差的特徴が容易にわかる度合い)」であり、格補填語は“了解”である。

〈例2〉【思考動詞語義の“了解”と“清楚”の統合例】

〈例2：VA型〉⁽²¹⁾

- ★(1) 這件事，我已經了解清楚了。(時制副詞を加えた「変化叙述」⁽¹⁵⁾)
- ★(2) 我們把事情徹底了解清楚了。(行為への意志様態を詳述する副詞“徹底”を加えた「出来事叙述」)

(“事情”はVO型内では“清楚”のO補填語にはならない。)

提題の単文型(1)と“把”統合型(2)との統合意義特徴⁽²⁴⁾の違いは、次のよう
にあらわれる。

(1) “了解”“清楚”のS補填語(重複)“我們”，“了解”のO補填語“這件事”

(2) “清楚”のS補填語かつ“了解”のO補填語(重複)“這件事”

(1) 私は徹底的に調査して、はっきり区別がついた。(精神の変化)

(2) 私は徹底的に調査して、はっきり区別をつけた。(出来事)

〈例2：V得A型〉⁽²²⁾

★事情的經過／真相／詳情，他了解得很清楚。

(思考動詞“清楚”のO補填語になれる語句が主題に選ばれた単文型：叙述の類型としては、精神状態についての「判定叙述」；“這件事”を主題として認めたのは1名のみ)

故に“清楚”のO補填語“事情的經過／真相／詳情”

；“了解”のO補填語と重複(=“了解得”は省略可能：過程とみなす)

“清楚”と“了解”のS経験者格補填語（重複）“他”

単義文：～について（調査した結果）、彼には区別がはっきりついている。

★☆他對這件事了解得很清楚。

（“對這件事”という介詞統合型で，“這件事”を第一次格の補填語として扱わず、状況を補足するための第二次格の詳述に用いている⁽²⁵⁾。介詞“對”は、「ある状況内で、判定行為の対象をクローズアップする」文法機能（語義）を表示する。すなわち、この文はO補填語を含まない。）

- | | |
|-------------------------------------|------|
| (1) “了解”のS補填語と“清楚”のS補填語（重複）“他” | } 多義 |
| (2) “清楚”の擬似格語義“了解得” ⁽²²⁾ | |
| (3) “清楚”の仮S補填語“（對）這件事” | |

多義文(1) 彼は調査した結果はっきり区別がついている。（精神状態）

(2) 彼が調査して知識を獲得するプロセスは、はっきり区別がつけやすい。（一連の典型的プロセス；事柄を状態として判断対象にする）

(3) 彼が調査した一件は、（その状況内で）はっきり区別がつけられている。（判定叙述）⁽¹⁵⁾

(2)においては、“了解得”が知識を獲得していることを事柄として表示している。“清楚”は、その事柄の示差的特徴の見だし易さを判断する判断形容詞として用いられている。文の意味としては、〈他對這件事的了解不很清楚〉の肯定表現として位置づけられる。

〈例2：A地V型〉⁽²³⁾

★他很清楚地了解到爲什麼那個工場會破產。

（重要な事件の原因調査だと、使い易い）

（“了解到”という述語補語統合型で、「調査を進めて、ある新しい知識を獲得する状態（異相）に到達した」ことを表示している。“爲什麼那個工場會破產”は、「調査すべき事柄すなわち関連した知識を獲得しようとする事柄を疑問代詞で指定する判断叙述」であり、“了解”の「思考対象格」を補填するO

補填語である。)

“很清楚地”は【A'地 V 型統合意義特徴 I】⁽²³⁾ の記述のごとく、「動作主が目的意識をもって設定した、異相で到達すべき状態」を疑似格語義として“清楚”の判断対象に擬することにする。

上記の“了解”に関連する意義分析によれば、“清楚”がこの単文型内で表示している「異相で到達すべき状態」は、「動作主が原因を調査してから、はっきり区別をつく知識を獲得している状態」である。

単義文：破産の原因を調査して知識を得たが、それは（もくろみどおり）明瞭なものになった（区別をはっきり示すものになった）。

★他清清楚楚地了解到（了）談判的内容。

（書面語としては使える表現とされる。“清清楚楚地”は意識的に努力して調査したことを表し、調査の対象を表す格補填語にも興味を引く事柄が選ばれる。）

この語感【A'地 V 型統合意義特徴 I】⁽²³⁾ で記述した「AA 形は動作主が積極的な意志をもって設定した「流相での動作のやり方に関する方向性」（この単文型では、「知識を明瞭なものにしていく」方向性）を描写対象（本稿の術語では、疑似格語義）にする」という規定によって、説明できよう。

★我們 很清楚地／清清楚楚地 了解這件事。

（1名だけ、もっともシンプルな用例（O 補填語が“這件事”）を挙げたが、他のインフォーマントの語感では舌足らずの表現とのことであった。使用者としては「調査して原因がわかる」という意義で使う。）

ある事柄について調査するという場合、なにについて調査するか（例えば、原因、目的、経過など）という優先順位は、文脈意義や単語そのものの意義素などの要因によって決定されると予想される。

3.3.2 “認識”との統合

“認識”と“清楚”の統合について考察を始める前に、“認識”の語義と“了解”の語義との示差的特徴を明らかにしておく必要がある。

【“認識”と“了解”の違い】

“認識”は“明確”と統合し，“了解”は“明白”と統合し，その逆は成立しない。“了解”は「内的直接経験としての知識を獲得する」ことを表すが，動作主自身の資質や思考力の変化を表すことはない。その相内プロセスで生じる変化は「(知識となる)情報の移動」である。“了解”する動作主自身には，その情報の質を変えたり，確定させたりする能力は与えられていないゆえに，“明確”による判断とは共起できないと考えられる。それに対し，“認識”は①見分ける，見知る (recognize) ②認識する (understand) の2つの語義をもち，その②の語義が“明確”と共起する。“認識”は，経験者が「思考力を働かすことによって，ある事柄についての正しい見解を認める」ことを表し，相内プロセスで生じる変化は，経験者自身の思考状態に生じる。したがって，この相内プロセスの変化は具体的には「見解の正しさ」を指し，この正確さは経験者の能力で確定できるものとみなされる。そのため，“認識”は“明確”と共起できると考えられる。

本稿では“認識”の意義素を詳しく規定しないが，上記の“了解”との示差的特徴に留意して，以下，“清楚”との統合のあり方を分析していく。(例文の先頭の★符号は，単なる位置表示である。)

〈例3〉【名詞語義の“認識”と“清楚”の統合例】

★對於這個問題，我們的認識很清楚：國家落後，就要挨打。

(“認識清楚”は「堤題担当 SP 型」であり，論説の言い出しに多用される)

★他對自己問題的認識很清楚。

(内省して見解の正誤が定まるような事柄なら判断対象格に使いやすい)

★我們對當前的局勢要有一個清楚的認識。(“清醒”が第一番目の連想語義)

(AN型は、“有”の賓語としてしか用いにくい)

★通過實驗，對慣性這一概念有了一個很清楚的認識。

“認識”の名詞語義の用例には“對～”という、何に対する見解であるかを表す介詞統合型が添えられている。このことから推定できるように、“清楚”の判断対象は「経験者がある事柄について認めた、正しい見解」である。

〈例4〉【動詞語義“認識”と“清楚”の統合例】

〈例4：VA型〉

★他對錯誤的性質已經認識清楚了／還沒認識清楚。

(「これまで彼自身の重大な過ちを軽く見ていたが、その本質について正しく認識できた」“清楚”に変化したのは“性質”そのものではなく、“性質”に対する彼の見解であり、思考状態である。また、介詞統合型で“錯誤的性質”を状況補足に用いているので、“認識”“清楚”の思考対象を表示するO補填語は存在しない。)

故に“認識”のS補填語“他”

“清楚”のS補填語“性質”

単義文：誤りの性質について、正しい見解をはっきりと認めた。

★他終于把那件事認識清楚了。

“事情”はVO型内で“清楚”のO補填語にはならない。故に“認識”のO補填語“那件事”⁽²⁴⁾とみなせる。

S補填語については、双通りの可能性を予想できる。

(1) “認識”のS補填語と“清楚”のS補填語(重複)“他”

(2) “清楚”のS補填語と“認識”のO補填語(重複)“那件事”

しかし、(2)の予想は成立しない。つまり、“把”統合型の統合意義特徴であ

る〈同一状況内での因果関係を出来事チェーンとして叙述する〉⁽²⁴⁾とは共起できない。なぜなら彼が“認識那件事(～)”する能力者として存在しても、“那件事”そのものは、彼の考え方によって“清楚”に変化することはないからである。

また、“把”統合型において、“把”以降の語句が語義構造のうえから【SVA了】型になるには、その成員と前文との因果関係のあり方に特殊な文脈的意義特徴が加わる⁽²⁴⁾必要があるが、その文脈も存在していない。

単義文(1)彼は考えたすえ、その件に対する正しい見解をはっきり得た。

★他認識清楚了問題的重要性。

★還不能說，我們已經完全認識清楚了事物的發展規律。

(1名のみ、賓語を単純な“這個問題”としたが、多数意見は「よく思考して(内省して)定められた正しい見解」を表示する語句をO補填語とした。)

この語感は、賓語Oの弁別の特徴がVA型内の「動作の対象としてふさわしい、すなわち動詞の連想語義に含まれねばならない」という【VA了N型の統合意義特徴I】⁽²¹⁾によって説明される。

“認識”の賓語の位置に置かれた格補填語は、その語義関係からだけ捉えたなら、2種類の格を表示する可能性がある。すなわち、「平相から存在する、正しい見解を考えねばならない事柄」として捉えたならば、思考対象格を表示するものであり、「経験者が考えたすえ異相ではじめて認めた(自分も気づき同意する)正しい見解」として捉えたならば、思考生産物格を表示するものである。“問題的重要性”の“重要性”、“事物的發展規律”の“發展規律”が、その存在を発見すること自体も「正しい見解」そのものとみなせるからである。しかし、本稿では“認識清楚了”という基本統合型の賓語としては、思考対象格をあらわすものと考える。そして、“(很)清楚地認識(到)(了)”の賓語として、思考生産物格が表示されると考える。

A地V・O型では、賓語の位置に正しい見解の内容を叙述するSP型がこれ

ること、VA・O型では相内プロセスでベクトル量の変化を認められる事物のみが判断対象にとりあげられること、の2点の理由からである。この解釈については、すでに記述してきた【VA (了) 型統合意義特徴I】【VA 型統合意義特徴V】が裏付けとなる⁽²¹⁾。

〈例4：V得A型〉

★他對這個問題認識得很清楚。

（“對這個問題”という介詞統合型で、“這個問題”を第一次格のO補填語として扱わず、状況を補足するための第二次格の詳述に用いている⁽²⁵⁾。介詞“對”は、「ある状況内で、判定行為の対象をクローズアップする」文法機能（語義）を表示する。すなわち、この文はO補填語の存在しない単文型である）

- (1) “清楚”と“認識”のS補填語（重複）“他”
 - (2) “清楚”の疑似格語義“認識得”
 - (3) “清楚”の仮S補填語“(對) 這件事”
- } 多義文

多義文(1) 彼は思考した結果、はっきり正しい見解を認めた。(状態)

(2) 彼の思考して見解を定めていくプロセスは、区別がつけやすい。
(一連の典型的相内プロセスを、事柄として判断対象にする)

(3) 彼が思考対象とした一件は、(その状況内で) はっきり見解が定まった。(判定叙述)⁽¹⁵⁾

(2)においては、“認識得”が正しい見解を認めていくプロセスを事柄として表示している。“清楚”は、その事柄の示差的特徴の見だし易さを判断する判断形容詞として用いられている。文の意味としては、〈他對這件事的認識不很清楚。〉の肯定表現として位置づけられる。

★他把那種人認識得清清楚楚。

(同じ現象素枠を指示するには、「他把那種人看透了。」のほうが普通」とい

う内省報告がある。“清清楚楚”を使うとしたインフォーマントは、みな“把”統合型を用いて、介詞“對”を用いなかった。第一に連想される文脈意義は「アイツはひどい人間だった、もうコリゴリしている」という慨嘆である。）

大滝 1995. では、“很” A 型と AA 型の双方をとれる形容詞の中で、V 得 AA 型のみで様態補語になるものの用例を考察し、それらの用例に意味分類を加えている（以下、要約 pp 48-99）。この意味分類は基本統合型としての V 得 AA 型の典型的統合意義特徴を示唆するものであると同時に、上位統合型である“把”統合型の統合意義特徴の規定についてもヒントを与えることのできる、「複合統合型の統合意義の分類」といえる。

①その物体の典型基準に比べて、異様な形状であったり、比喩的な形容を加えられている。

罐頭摔得扁扁的。(下へ投げつけて滅多にない形状になる)

肚子餓得癩癩的。(形状としては比喩的)

她看見一條蛇，把腿嚇得軟軟的。(“把”統合型必要，形状としては比喩的)
一跤把鼻子摔得歪歪的。(“把”統合型必要，形状としては比喩的)

②人間の生理状態・感覚に変化を起こす⁽²⁴⁾。

V 得呆呆的。 → V=驚，看，聽，想

他突然猛擊一拳，把我打得愣愣的。 —
……………，我被打得愣愣的。 — (“把”統合型または“被”が必要)

→ V=問，笑， (“把”統合型または“被”が必要)

連續發燒四天，把他燒得迷迷糊糊的。(“把”統合型必要，“睡”も同様)

→ V=灌 (“很迷糊”も可。“灌醉”より連想)

③平相のスペースにあったものが異相では消滅する。

要把撒了的墨水吸得幹幹的！ (*?墨水吸得很幹) (“把”統合型必要)

油耗得幹幹的，必需加油的。

V (自動詞) 得光光的。 → V=流，漏， (液体がなくなる)

／跑，死，走（人がある場所からいなくなる）

他把家産折騰得光光的。（“把”統合型必要）

④本来，ある状態になりそうにない物をその状態に変化させる。

毛衣要弄得潮潮的。（“要”が必要；アイロンかけなど）

你別把抹布蘸得濕濕的。（“把”統合型必要）

以上の考察では“認識”と“清楚”の組み合わせが検討対象に入っていないかった。上記例文内の思考動詞と“清楚”の複合統合型の統合意義は、②グループの「人間の生理状態・感覚に変化を起こす」に類似している。しかし，“把”統合型の賓語として経験者格補填語を置かない点で，基本的な統合意義特徴を異にすると考えられる。したがって，“認識得清清楚楚”が〈不快感〉を表しやすいことについては別の角度からの検討が必要である。

同じ“認識”と“清楚”の統合でも，“認識清楚”は典型的VA型に属し，いかなる外圧が加えられようとも，その相内プロセスで経験者に生じる変化は「穏当かつ妥当」なものである。それに対し，“認識得清清楚楚”は，判断形容詞“清楚”が描写形容詞形に変形し，相内プロセスでのベクトル量の変化ではなく，状態の固定した事物を描写対象として〈固有の特徴〉を描写する点で，まず“認識清楚”の統合意義と区別される。

本項では“清清楚楚”の描写対象を“認識得”と解釈する。“他”“那種人”という語句には“清楚”と共起すべき固有の弁別の特徴が存在しない。また，“清清楚楚”は判断形容詞としての重畳形式であり，思考動詞の重畳形ではないことから，“他”“那種人”が経験者格補填語になることも不可能である。そこで，人物を“認識”する出来事の中核となる「“認識”の相プロセスでの異相の状態」を，“清清楚楚”が描写していると本稿では考える。描写対象は，「人物を見知っている→その特質を理解し一定の見解をもっている」という事柄であり，それに対し“清清楚楚”は「その人物をとことん分かっている；マザマザとした人物像を抱いている」という描写を加えている。“了解”の異相

が表す知識の獲得状態とは異なり，“認識”の異相が表す状態（現象素朴と捉えなおしてもよい）は「思考する経験者の裁量がきく状態」であり、事柄として描写対象になりやすいと考えられる。事柄を判断対象や描写対象にする統合については、次稿であらためて論じることにする。

★大家對這種事認識得清清楚楚。

（「過去に同じようないやな事があったので、もうこれ以上同じことは繰り返しはしない」という慨嘆を第一の連想語義として表す。時間的経過を踏まえた状況判断、すなわち「叙述時間が前後している、複数の状況」を比較し対照した文脈意義が、複合統合型の統合意義特徴によって表されていると、解釈することができる）

“把”統合型は、同一の状況内（同一叙述時点・地点）の出来事連鎖を表すと規定してきたが、この規定は、“對”を用いた上記例文が表す「時の隔」の語感が“把”統合型では表現されないことを説明できる。“對”がクローズアップする判定対象には、時空の制限が加えられないという規定もたてられる。

〈例4：A地V型〉

★他很清楚地認識到：和別人相比，他必須付出加倍的努力。

★通過這次考試，他很清楚地認識到不學習是不會有好成績的。

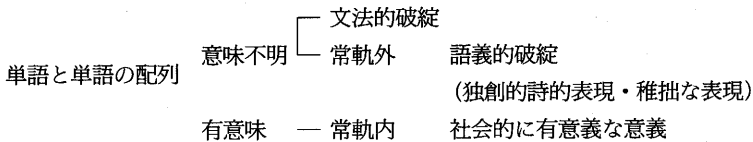
★我們很清楚地認識（到）問題的重要性。

“認識（到）”のO補填語は「思考生産物」であり、考え終えてはじめて、その存在が確認された「正しい見解（異相で初めて正体をつかめた考え方）」である。考え始める事点、考えている途中の事点で存在しない見解の把握のあり方（状態）に対して、“清楚”という判断をくださるのは、A地V型が「状況全体の中から判断対象を選び出せる」という統合意義特徴を有するためと解釈できよう。この点については、【A地V型統合意義特徴Ⅲ】に説明能力があると考えられる⁽²³⁾。

4 おわりに

本稿は判断形容詞“清楚”と6種類の動詞グループが構成する統合型について、その統合意義を分析することにより、統合意義特徴を記述する論考の第一稿である。基礎的な意義素分析の手順を踏んで、調査対象とする単語の意義素の記述を行ったため、紙幅が付きた。次稿からは、意義素の記述は分析結果のみを記述することとし、VA型、V得A型、A地V型の基本統合型だけでなく9種類の上位統合型についても、その統合意義特徴を分析していくことにする。

- 1 大滝幸子 1995「述語補語統合型の統合意義特徴—動詞と形容詞との組み合わせを対象として」東洋文化研究所紀要第128冊 pp 1-62
 1996 a 「状語中看語統合型の統合意義特徴—形容詞と動詞の組み合わせを対象として」東洋文化研究所紀要第129冊 pp 1-62
 1996 b 「判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析」東洋文化研究所紀要第131冊 pp 117-181
- 2 本稿が用いる「統合意義」は〈社会的に有意義な意義〉でなくてはならない。それは意味論上次のように位置づけられる。



- 3 従来の国語文法論では「陳述が加えられる」と呼ばれてきた文の成立条件を、本稿では、一つの文の内部に成立した「最大述語成分を含む主述統合型(主述文統合型 SP 文型)」の統合意義特徴として考察する。従来の研究を鑑み、本稿では以下の4特徴が存在するものと仮定する。

I：一人の話し手による発話が一つのタームとして言い切られて、文として伝達される2条件を言語形式で表示する。

- (1) 話し手自身の発話の真偽に対する価値判断「述定特徴」

(2) 話し手から聞き手への言語行動による働きかけ（「伝達特徴」）

II：聞き手によって「文の叙述内容が完全に理解される」ために必要な要件を、言語形式を用いた文脈意義に、発話場面の状況意味を加えて伝達する。

(3) 過程や行為を表現する文が伝達しようとする出来事が生じた時点と場所（「叙述時点と叙述地点」）と、その内部の様子（「流動状況と名付ける」）

(4) 状態を表現する文が伝達しようとする様子（「静止状況と名付ける」）

4 朱德熙 1956. 「現代漢語形容詞研究」《語言研究》第一期

本稿では朱德熙が形容詞に加えた2分類の名称、性質形容詞と状態形容詞とを各々「判断形容詞」と「描写形容詞」と名付け変える。“性質”という術語は、判断形容詞の下位区分として、性質形容詞と属性形容詞を分ける場合に用いる。“状態”という術語は、文の叙述内容を認識パターンに基づいて、〈変化と状態〉〈行為と運動〉に分ける説（池上嘉彦 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店）での定義や、文の骨格的意味構造の中核命題として〈状態〉〈過程〉〈行為〉の3類型をたてる説（中右実 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店）における定義に基づいて用いたい。

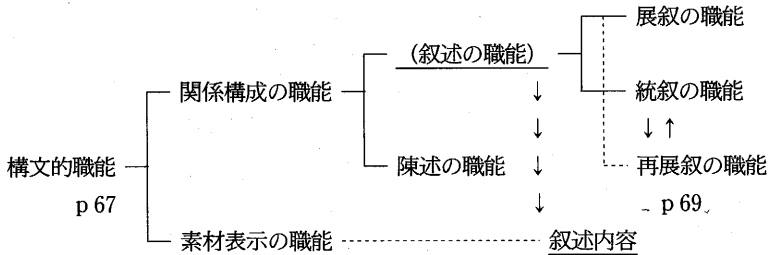
5 大滝幸子 1999. 「中国語動詞と形容詞“清楚”とが構成する統合型の文法的意義特徴(1)」金沢大学中国語学中国文学研究室紀要第3輯, pp 1-48

判断スケール, 評価スケールは, 各々判断形容詞と評価形容詞（プラスマイナスの価値判断が加えられている。VA型の統合意義に特徴をもつ）の意義素が含む弁別的（文法的意義）特徴の一つとして規定してある。本稿では, 判断スケールの内部に数量スケール（旧判断スケール）と帰属度スケールとがあるものとする。そして, 評価形容詞の測定方法に用いられると定義づけてきた「価値評価の伴う帰属度スケール」を評価スケールと名付け変えることにする。なお, “清楚”の程度は数値化できず, イメージを両極とする帰属度スケールによって判断されるものと仮定する。

6 中右 1994. (注4参照)の3命題〈状態・過程・行為〉のうち, 〈過程・行為〉には出来事内部の変化の段階を追う認知過程を表す文法的事項, すなわちアスペクトが伴うものと考えられる。筆者はこの相プロセス内の〈事の流れる時間〉を, 発話時点との対比で計測される〈文が叙述する時間(叙述時点と呼ぶ) — 「状況」ごと〉に指定されている一と区別して, 〈事点〉と名付けている。

7 本稿で用いる「叙述内容」「叙述の営み」という術語は, 渡辺実 1974. 『国語構文論』塙書房における構文的職能を表す術語より援用した。

(アンダーラインは筆者による)



叙述とは、一つの思想や事柄の内容を外形化してととのえようとする言語主体（本稿では「第一人称者」に相当する）の表現活動（本稿では「叙述の営み」と言う）である。そしてその内容をととのえまとめるためにはたらく様々の関係構成の職能を、一括して叙述の職能と言う。

展叙とは、右の叙述の職能の中、特に叙述を展開するための職能である。展叙の職能を託される内面的意義は、素材（本稿では「単語の意義素」「統合形式の統合意義」に相当する）と素材との間に認定された関係概念である。

（本稿では①用言の意義素内の格とその格補填語の間の呼応関係

②虚辞（構造助詞、介詞、副詞の一部など）が指定する統合意義の間の呼応関係：p 69「再展叙」を別にたててあるのは、日本語の用言の終止形と連体形が同一であることによる。前者は陳述の関係構成の職能が加わるのに対し、後者は再展叙の関係構成職能が加わるとするためであり、本稿ではこの展叙と再展叙の区別は不必要である。

③虚辞（程度副詞、アスペクト助詞など）が実辞の現象素内部の特徴（形容詞の判断スケール内の値、動詞の相プロセス内の位置づけなど）を指定する関係）

以上の3種類の文法機能を取りあげる。）

統叙とは、右の叙述の職能の中、特に叙述を統一完了するための職能である。統叙の職能を託されるの内面的意義は、言語主体の精神の統合作用である。（本稿では、「用言を含む統合型の統合意義特徴」に相当する）

叙述内容とは、叙述すなわち展叙と統叙によってととのえられた、一つの思想や事柄の内容（本稿では「文中での統合型の統合意義」のうち、最大のものを指す術語として用いる）である。叙述内容は内面的意義の次元のもので、構文的には素材表示の職能が託される。p 67

陳述とは、統叙によってととのえられた叙述内容、または無統叙の素材の要素（筆者注：感嘆詞や呼称による一語文など）に対して、言語主体（本稿では「表現

者」または「話し手」に相当する)が、その素材あるいは対象・聞き手と自分自身との間に、何らかの関係を構成する関係構成的職能である。陳述の職能を託される内面的意義としては、言語主体の断定、疑問、感動、訴え、呼びかけが認められる。(本稿では陳述の職能に「述定」「伝達」の2種類を区別する) p 106

文とは、統叙・無統叙の差を越えた素材表示の職能と、陳述の職能との、職能的結合体であり、したがって陳述の職能の差を越えて常に成分ナあるという意味で他の各種成分と同質である。ただし他ならぬ陳述の職能によって形成される陳述成分であることにおいて、他の成分と異質である。また、陳述の内容である意義の完結性(本稿では「発話場面において伝達の目的を果たし得るのに十分な情報量を備えること」を完結性の定義とする)のゆえに、文は意義的完結体であり、またその故に形態的独立体である。p 107

なお、上記の渡辺実の陳述論と他の研究者の文についての論考との比較が、次の著述にみられる。

南不二男 1993『現代日本語文法の輪郭』大修館書店 p 52

金田一春彦、渡辺実、芳賀綏、服部四郎、林四郎、各氏と南氏自身の四段階に分けた文の階層意味論が比較対照されている。

8 渡辺 1974. (注7参照)における「展叙」「再展叙」「統叙」の職能などを、人間の外界認知の方法、および聞き手への情報伝達方法として捉え直すものである。

9 本稿で参考にした認知言語学文献

Fillmore, Charles. 1982. "Frame Semantics" *Linguistics in the Morning Calm*: pp 111-138

Langacker, Ronald, W. 1986. "An Introduction to Cognitive Grammar." *Cognitive Science* 10: pp 1-40

Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*: University of Chicago Press (訳本『レトリックと人生』大修館書店)

Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental Spaces: Aspect of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge, mass: MIT Press 7

George, Lakoff. 1987. *Women, Fire, Dangerous, Things* The University of Chicago Press EP (池上嘉彦、河上誓作ほか訳 1993.『認知意味論』紀伊國屋書店)

10 本稿で参考にした意義素論文献

服部四郎 1953 「意味に関する一考察」言語研究 22/23号 日本言語学会

1966 「意義論：日本の記述言語学(2)第5章」国語学第64集

- 1968 a 「意義素の構造と機能」言語研究 45号 日本言語学会
1968 b 「意味」岩波講座哲学 11言語 岩波書店
1974 「意義素論における諸問題」言語の科学第5号東京言語研究所
国広哲彌 1967 『構造的意味論』三省堂
1970 『意味の諸相』三省堂
1982 『意味論の方法』大修館書店
池上嘉彦 1975 『意味論：意味構造の分析と記述』大修館書店
- 11 <現代漢語詞典>商務印書館 1996
<形容詞用法詞典>湖南出版社 1991
<實用漢語形容詞詞典>中國標準出版社 1990
- 12 <近義詞應用詞典>語文出版社 1987
<反義詞詞典>黑龍江人民出版社 1988
<漢語郡內詞詞典>馴統慕社 1986
<新編多功能詞典>國際文化出版公司 1989 (類義語解釈が語義解釈に含まれる)
- 13 大滝幸子 1995. 「中国語に於ける連体修飾統合型と主述統合型の文法的意義特徴……形容詞と名詞の組み合わせからの分析」金沢大学文学部論集文学科篇第15号
- 14 “汽車很快”は言えても，“很快的汽車”は妙な表現であること，“塞子很防”の統合意義は「栓がゆるい(抜け易い)」であり，“很防的塞子”の統合意義は「スカスカな材質の栓」という意味であることも裏付けとして挙げている。
- 15 “過程”という術語は、中右 1994. (注4, 注6参照)の階層意味論において、次のように定義づけられている。pp 309-373 (20.2 基本命題の内部構造：より)

『中核命題の内部構造は、人間が世界の状況をどのような類型に分類しているのかを指し示す、と仮定したうえで、それを〈状態 state〉〈過程 process〉〈行為 action〉と分ける。おのおのは述語と項の関係からなり、述語が項の数と項の意味役割を決定する。状態の祖型述語は BE 〈ある〉であり、項は THING 〈もの〉と PLACE 〈場所〉であるが、日本語では場所に〈性状(すなわち抽象的位置)〉がこれるので、空間的場所とあわせて LOCATION 〈位置〉が項になると考える。過程の祖型述語は GO 〈なる〉であり、項はやはり THING 〈もの〉と PLACE 〈場所〉である。ただし、英語でも日本語でも状態変化と位置変化(空間的移動)とを合わせた理論的述語として考える。行為の祖型述語は DO 〈する〉項は、ACTOR 〈行為者〉と THING 〈もの〉である。』

本稿では、これらの3概念〈状態〉〈過程〉〈行為〉を祖型述語にのみ存在する、語彙レベルの文法的意義特徴として扱うのではなく、〈出来事〉の下位区分とする。

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴

そして、筆者がSP型統合意義特徴としての「(状況内) 叙述の営みの類型」として設定する〈事実〉〈論理〉とそれぞれに結びつく体系的概念として扱うことにする。

本稿では詳しく論議しないが、これらの概念体系は、中国語の接続を支配する叙述の論理とされてきた〈意合法〉の文法的メカニズムに対して説明能力を発揮できるものと予想される。すなわち、言語形式化された接続形式を使わなくても、統合意義そのものに含まれる「命題を文として言い切るまで、叙述の営みを続けていく要因（「展叙要因」）が含まれるかどうかを説明しようとする予想される。

〈状態〉	—〈判定叙述〉	（☆無変化）	；論理	—————	；真実
〈過程〉	—〈変化叙述〉	（★無意志）	↑	（+判断）	
	[状況；時空]	（☆有変化）	；事実	—————	；現実
〈行為〉	—〈出来事叙述〉	（★有意志）			

単語；基本統合型など 介詞副詞統合型など； 単文型 ； [述定の基準]

- 16 大滝幸子 1992 「「人間を形容する形容詞の意義素記述」における日中対照研究」
明海大学外国語学部論集第5集 pp 65-80
- 17 大滝幸子 1988 「「知道，明白，懂得」の意義素記述」中国語学第235号 pp 65-75
- 18 話し手と聞き手の間のコミュニケーションのあり方を考察する「情報のなわ張り理論」で用いる基本概念を援用。ただし、本稿では、なわ張りの所有者の一方として設定される存在と、その所有する情報は、次の文法機能上の4レベルで考察できると仮定する。

- ①不定人称者レベル（格補填語としては現れない意義素内の形容詞などの意味的事項（判断者など）の規定である；認知活動を行う人格者）
- ②第一人称者レベル（格補填語となる言語形式が表す動作主，経験者など）
- ③表現者レベル（話し手が表現しようとする述定，すなわち話し手が「叙述内容と自分との関わりを指定する」場合の「自分」：このレベルでの叙述内容が、「情報のなわ張り理論」で基本的に扱われてきた情報である）
- ④話し手レベル（話し手が表現しようとする伝達，すなわち「聞き手に対し伝達目的，感情，立場などを指定する」場合の「話し手」）

上記の、格レベルに存在する「情報のなわ張りの所有者」が相手方とどのように情報を分割しているか、などは、それぞれ単語の意義素内の意義特徴、または統合型の統合意義特徴の規定に含まれることがある。また、③④のレベルでは文脈意義と場面意義の類型としても記述されることがある。

本稿で“了解”の語義的意義特徴として記述された〈内的直接体験〉は、②レベルで見いだされるなわ張りのあり方であり、主語（動作主）として“我”が選ばれた場合を除いて、必ずしも話し手自身のなわ張りとは一致するものではない。

Kamio, Akio. 1990 『情報のなわ張り理論』 大修館書店

1997 *Territory of information*. Amsterdam and Philadelphia:
John Benjamins

- 19 Leisi, Ernst. 1961 *Sein Struktur im Deutschen und Englischen*. Quelle & Meyer · Heidelberg (鈴木孝夫訳 1974. 『意味と構造』 研究社

相対的な判断を下す際の、潜在的基準として次の4種類をあげている。

①種の基準、②比率的基準（同一個体の形状について部分相互を比較する方法、物体の形状を表す形容詞について問題とされる）、③個人的な期待基準、④適格基準（ある行為の目的を達成するのに適している、ことがらの様相の基準）

また、動詞の意味にも、かくれた絶対基準が存在するとする。

（訳書 pp 162-175, 要約）

本稿での典型基準は、「ベクトル量を示す形容詞の、帰属度スケールの極」として設定される、社会的に認められた「典型的イメージ」とする。

- 20 現象素論について、本稿で用いた参考文献

國広哲彌 1994 「認知的多義論—現象素の提唱」 語研究 106号 日本言語学会
pp 22-43

また、本稿における現象素の定義は、以下の、大滝 1999. p 6 の定義を踏襲する。

『本稿では、國広 1994 で提唱された「現象素」の概念を、自然言語の個別性から本質的に解放された普遍的単位として次のよう扱うことにする。

- ①外界および精神界の様相を、話し手が言語形式を使用する際に、意義素が指示しうる範囲に枠づけて切りとることによって現象素が成立する。
- ②その現象素を言語使用時に伝達しようとする情報全体の一部分として位置づけることによって現象素枠が成立する。
- ③現象素枠を成立させる普遍的な言語的認知過程が、叙述の営みであり、また統合意義特徴として記述されるべき言語行為の特徴である。

このように、現象素を人間の普遍的認知過程を通して成立する「(発話時において、話し手の認知活動によって) 枠づけて切りとられた様相」と捉えることによって、「個々の認知活動のあり方を記述する」ことを、普遍性を保証された文法的意義特徴の記述すること（とみなせるようになる）と考える』() 内は本稿での付記。

- 21 筆者がこれまで記述してきた、意義素論に基づく【VA (了) 型】の統合意義特

徴は以下の通り。

【VA (了) 型統合意義特徴 I】(大滝 1995, p 22 →改変箇所あり)

VA 型はつねに述語動詞が表す動作行為の行われる状況内で, 第一人称者が設定した何らかのベクトル量を見いだすスケールを用いて, 動詞が表す「出来事」の変化の過程を形容詞を用いて判断する。

〈注〉「出来事」; 事柄・出来事・事実・現実という 4 段階の概念体系内の一つ。

動作行為と経過について, 事の流れと時の流れとの関係を 4 段階に区別する。

「現実」は, 話し手が発話行為を行う発話時点での事の流れ。

「事実」は, 第一人称者が叙述の営みで述べようとする状況 (発話場面に対峙する叙述場面。叙述時点と叙述地点が特定されている) 内の出来事。

「出来事」「事柄」とともに特定の状況からは切り離されてクローズアップされる事の流れ。ただし, 「出来事」は, どの状況であるかを問わず, 相プロセスや動作対象などに特定の特徴指定が加えられている事の流れ。

「事柄」は, 動作行為または経過, 状態を最も抽象的なパターンとして捉えた, “名辞的” 概念。対立する概念は「物体」

これらの文意味論上の概念を現象素論に置き換えると, すべて前景 (= 因) となる現象素 (梓) と背景 (= 地) となる状況との関係づけ, 状況と発話場面との関係づけの区別として記述することができる。

【VA (了) 型統合意義特徴 II】(大滝 1995, p 20) 〈典型 VA 型の規定〉

VA 型は動詞の平相に存在する事物がそのまま異相まで存在した場合 (すなわち「動作主格」「動作対象格」として存在した場合), 動作行為を経て平相と異相との状態を具体的に比較した判断結果が, 動詞の意義素が指示する「事柄」の内での穏当な変化であると, (不定人称者によって) 認められた場合に「典型 VA」となる。

そして他の文法レベルにおけるすべての比較判断基準を付加する (または受け入れて共起する) ことができる。

〈注〉平相・異相; 動詞の意義素の内部構造は相内プロセスを表す 3 個の意味的事項「平相・流相・異相」によって特色づけられる。

平相は, 動作行為変化が発生するスタート事点前の前提となる状態。流相は, 変貌をとげつつある過程。異相は動作行為変化が終了するゴール事点以後の, 平相とは異なる安定状態。

本稿では, 動詞の現象素内の構造を考察するにあたり, 各相に「第一次格」としてクローズアップできる「格要素」(動作主格, 対象格, 道具格, 生産物格など格補填語で表示される) と, 「第二次格」としてクローズアップできる格的な物体や

事柄（介詞構造で「状況への添加」として表示できる）の存在を認める。

【(N) VA (了) 型統合意義特徴III】(大滝 1996 b. p 131 →変更箇所あり)

形状を表す形容詞を結果補語成分とするには、「述語成分となる動詞の格を担わされた行為対象や生産物」さらには「道具 (p 134), 当体 (p 136), スペース (pp 172~174) 身体部位 (p 136)」についての「動詞の異相に存在する物体としての形状に関する弁別的意義特徴」と、その形容詞の弁別的意義特徴とが抵触してはならない。

(この意義素どおしの共起制限を現象素枠の観点から捉え直すとう記述できる)

NVA 了型内の形状を表す形容詞は「動詞の意義素が指示する現象素に内在する異相に存在する物体の形状」を判断対象とする。

【(N) VA (了) 型統合意義特徴IV】(大滝 1996 b. p 162)

【動詞が方向指定特徴を持つ場合】

その判断形容詞が使う判断スケールが、〈動作方向と逆方向である場合〉には、その判断基準の基準値に比べて必ずマイナス値を示すことになる。しかも、基準値に向けての意図的な修正による変化は表示することができない。

判断形容詞が使う判断スケールが、〈動作方向と順方向である場合〉に限り、①基準値に到達したこと②基準値を超過したプラス値も表示できる。

(なお過分義は、判断基準として適正基準が使われた場合にのみ生じる)

さらに、意義素論という個別言語の体系を記述するための方法仮説から、より普遍性が保証された文法記述が行なわれ易いと予想される、現象素論仮説による統合意義特徴記述を試みた。

【(N) VA (了) 型の統合意義特徴V】(大滝 1999. p 12) 〈現象素論〉

VA 型の中では動詞現象素が指示する相プロセスに対し、形容詞現象素もスケールを一定方向にたどって変化するプロセスを認知するものでなくてはならない。

また、賓語の位置に格補填語を加えた上位統合型についても、考察を加えてきた。動詞の現象素内の格要素に注目した結果、主語の位置と賓語の位置で表現された場合の統合意義特徴に区別があることを見いだした。

【VA了N型の統合意義特徴I】(大滝 1996 b. p 145)

動詞の賓語となる名詞の意義素の中に、その動作動詞が表す動作を受けるという弁別的意義特徴が含まれるという、「述語に対する賓語優位の共起制限」が存在する。(付記：共起制限を支配する機能が名詞に加えられる)

【VA了N型の統合意義特徴II】(大滝 1996 b. p 145)

その判断形容詞について設定される判断基準が「名詞の表す事物に対してイメー

じされている常識基準（付記：典型基準とも呼ぶ）」と一致する。

【VA了N型の統合意義特徴Ⅲ】（大1996 b. p 148 →追加と改変部分あり）

【Nに対して指示詞による限定修飾が加えられて、統合が成立する場合】

動作行為の対象となった物体，または動作行為の結果生じた生産物にとって，加えられる動作行為が目標とする適正基準が必ず存在していて，「動作行為が失敗して適正基準から逸脱した結果としての過分義」を判断形容詞で表す。

（付記：一般論の叙述ではなく，「個別の出来事叙述」（事実として実現済み）を表示する）

22 筆者がこれまで記述してきた，意義素論に基づく【V得A型】に関する統合意義特徴は，以下の3種類である。

【“V得”の文法的意義特徴】（大滝1995. p 36 →改変箇所あり）

「V得」は事柄を示すにとどまり，動詞の表す弁別の特徴以外は表示しない形式である。したがって，「弁別の特徴以外の特徴を特に必要とするような動作」の様相である現象素を指示することはできない。（付記：形容詞の格補填語として，“很”A形に対する判断対象格やAA形に対する描写対象格を表示できる）

【(N) V得A型統合意義特徴Ⅰ】（大滝1995. p 34 →改変箇所あり）

V得A型の現象素枠内には「V得」の意義素が要求する「動詞が他の名詞と結合関係を充たし，かつ異相まで完遂した現象素」がひとつ存在する。それは，事の流れは示すが叙述時点を担うことがなく，「事柄」を表す。

また，V得A型の現象素枠内にはその他に形容詞の意義素が指示するもう一つの「格補填語または疑似格語義を求める現象素（他の現象素に働きかけて，一連の現象素枠を構成しようとする現象素）」が存在する。それら，動詞と形容詞の間では，形容詞が格として判断（評価）対象・描写対象・原因・経験者のどれを選ぶか，また，動詞が選んだ格とどのような相互関係を結ぶかにより，複合統合型（または上位統合型）の統合意義の指示する現象素枠の様相が決定づけられる。

【V得A型統合意義特徴Ⅱ】（大滝1995. p 39 →改変箇所あり）

V得A型では，形容詞が多義語構造を有する場合，本義が第一に優先され，その本義が基本的な格関係を優先的に支配する（格補填語を優先的にとる）。

本義から派生義へは原則的に次の優先順位がつけられる。

- ①具体的な形状の判断・描写
- ②スケールが明確で数値化できるような判断
- ③好悪の判断・知覚を基準とした評価
- ④感情・感情を誘発するような状態

23 筆者がこれまで記述してきた、意義素論に基づく【A地V型】の統合意義特徴は以下の3種類である。

【A地V型統合意義特徴I】(大滝1996 a. p.45)

【形容詞が判断・評価(褒貶)形容詞であり、かつ主語が動作主格である場合】

動作主がある動作を行うにあたって、動作の異相・流相に対するプランの、たてかた(もくろみ)を形容詞で詳述する。

“很”A形は異相(到達する様相)に対する意志(=もくろみ)を判断・評価対象とし、AA形は流相(動作のやり方)に対する意志(=もくろみ)を、描写対象とする。

【A地V型統合意義特徴II】(大滝1996 a. p.55→改変箇所あり)

【形容詞が感覚・感情形容詞であり、かつ主語が動詞の動作主格である場合】

〈感覚感情形容詞が原形である場合〉、動詞の動作主格と形容詞の経験者格とが同一の人物を表示する名詞で担われることによって、形容詞意義素の指示する現象素枠と動詞意義素の指示する現象素枠とが連結されて、一つの状況をつくる。すなわち、形容詞の現象素枠から動詞の現象素枠へと事柄が一貫してつなげられ、一連の出来事叙述が成立する。

〈感覚感情形容詞が“很”A形である場合〉、経験者格・原因格がふさわしい名詞によって補充されたことを、第一人称者が肯定する。

経験者格は動詞の動作主格と一致する。形容詞意義素が指示する現象素枠と、動詞意義素が指示する現象素枠とは同じ状況のなかで連結されて、感情状態と行為結果とが並存する描写叙述が成立する。

原因格は、動詞が指示する現象素枠の事柄さらには状況の一部としての出来事すべてと一致する。すなわち、第一人称者(通常話し手と一致する)が、感覚感情を引き起こす原因として、出来事を認知し評価することにより判断叙述が成立する。

〈感覚感情形容詞が重畳形である場合〉、経験者の様子を描写することを主眼とする描写叙述が成立する。描写される対象(状態)は、動作主を中心とする出来事と同じ状況のなかで並存しうる、経験者の感覚感情心理であるが、並存できるかどうかは、「動作主がつくる出来事が、通常その感覚感情心理を伴いがちだという社会通念」が存在するかどうかを基準として決定される。

また、以上の3種類の統合意義特徴を検討する過程で、単独で一つの文法成分を構成する形容詞に対して、副詞との統合や重畳形への変形によって文法成分を構成する場合の形容詞を「評価形容詞形」「描写形容詞形」として区別する必要を認め、判断形容詞に関して、次の統合意義特徴を新たに記述した。

【A'地 V 型統合意義特徴 I】(大滝 1996 b. p 168 →改変箇所あり)

動作主がある動作を行うにあたって、動作の異相・流相に対してたてたプランが事実化された時点での状態を、第一人称者が「評価形容詞としての文法的意義特徴 (付記:判断スケールに分割点が置かれる)を付加した判断形容詞“很”A形で詳述する。また、「描写形容詞としての文法的意義特徴 (付記:判断スケールを用いず、ベクトル量としては捉えられない個別の特徴を捉える)」を付加した判断形容詞 AA形で詳述する。(付記:本稿では前者を「評価形容詞形」と呼び、後者を「描写形容詞形」とする)

〈“很”A形〉は動作主が目的意識をもって設定した「ある事物の異相で到達すべき状態」を判断対象とし、〈AA形〉は動作主が積極的な意志をもって設定した「流相での動作のやり方に関する方向性」を描写対象とする。この統合意義特徴に関する先行研究として、以下の論文がある。

原由起子 1989.「程度副詞“很”と状語の関係について」姫路独協大学外国語学部紀要第2号 pp 173-190

さらに、現象素論に基づく統合意義特徴の記述で、述語の類型との関連を記述した。

【A地 V 型統合意義特徴III】(大滝 1999. p 35)〈現象素論〉→改変箇所あり

状況全体の有り様について、その状況が成立する時点(過去, 現在, 未来)において、すでに存在した, 存在している, 存在しうる 3種類の出来事,

- ①動作行為 (ex. 事実として発現している行為, 実現への意志)
- ②過程 (ex. 同一状況内での同一動作主の感情と行為の継起関係)
- ③状態 (ex. アスペクト助詞“着”が指定する流相, 異相)

これらを表示する述語の類型について、それを構成する動詞意義素が〈指示している現象素枠〉内から、詳述対象として詳述できるものを見だし、第一人称者が形容詞を用いて詳述する。

しかし、その詳述対象を新たな現象素としてとりだして、言語形式を用いて指示することはない。

- 24 大滝幸子 1999.「中国語動詞と形容詞“清楚”とが構成する統合型の文法的意義特徴(1)」中国語学中国文学研究室紀要第3輯. pp 30-31

「通常の“把”統合型とは異なり、賓語にAの経験者格を担わせる【(Ns) 把 Ns2 VA】統合型の統合意義特徴を、こう規定する。

【(Ns) 把 Ns2 VA】統合型の統合意義特徴【現】

(1)同一状況で発現した出来事をおしを、相プロセス内には存在しない

“他人の行為への常識的反応”や“事のなりゆきから生まれる生理現象”を判断根拠として、因果関係で結ばれた出来事として、言語化する叙述力を有する。すなわち認知過程を表示する。

(2) 〈動詞が行為動詞である場合〉

行為者の行為の相プロセス内に存在する格的要素をクローズアップして形容詞の形容対象とする他に、状況内に存在する「他の行為関連者」も形容対象にクローズアップする現象素枠連結機能を有する。」

- 25 意義素内に含まれる第一次格と、状況の詳述に用いられる第二次格の概念については、大滝 1996 a. (注1) pp 12-13, 参照。